俳諧古集之辨

全

へ 5
1189

早稲田大学図書

俳諧
古集之辯

我

東方今古滑稽人多矣蓋芭蕉翁者其詞宗
而可謂俳中之聖矣其言也微而婉其行也
卓犖放情丘壑天地以爲家古池之一詠殊
以爲會心之第一義詠造化之自然而不失
纖巧遂自爲一家於是海内言俳者風靡焉
若別爲黨爲異論之徒者實非正風也

羽州　閑涼亭荷笠謹題

古集之辯

序詞　貫桃溪

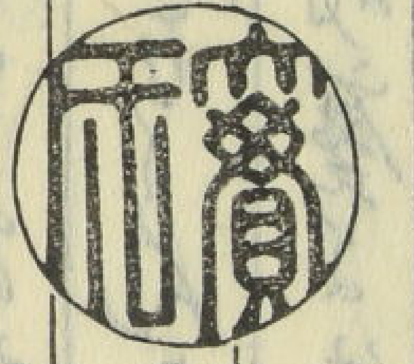
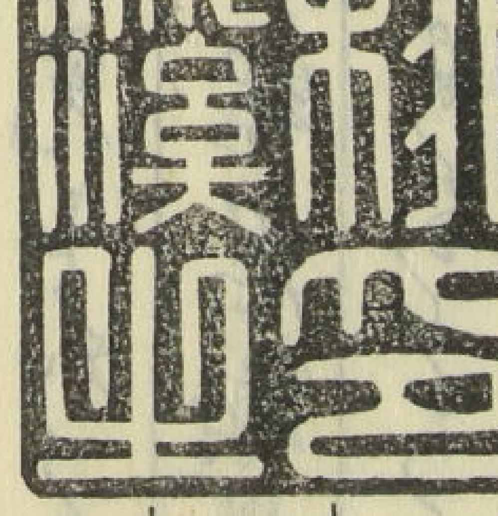
游戯三昧院

我か父葛松子翁に随して性あの流のう
滑稽を好めり壮年に及て美濃の漂
遊し一えしひ五升か老仙に謁するに悟く
えして蕉識のことく言下に其味か西風を
皆ひなるより自ら雪ふ深き雪に嶋ろ
て遠境の風雅にもの多きを通し白山の
社友を指揮しまるに連ありとそ志を
まみるとして終に美濃に洞に帰あり

てのちさへ京乃俳諧も既に三國の世
乃衡をはかりかねて己かさまくに
わかれたる中に難波にあらしぬの江
戸もさらに文字も嫌はれてやひとり美濃に
獅子をいふもの好て古調の吟をまもり嗚呼
蕉翁の遺訓を金科のあるなりて其又
祖風を慕ふの徒しを含めるの衆を出て
人もなくなりにけりしに先その後して
元禄中の俳集を講せしむるに門人等その
講説を筆受せる物文庫にありて世に

来たりし蕉翁一百の遠忌にあたりてせんかたく
此稿を世に公にしてそれに抄の光をかゝやかす
子門に復古の基ともなさんに報恩謝徳の
この上やあるまじと餘磨に海るあらなり
諫めもしもわれと謙遜にして敢て認せしたる
しなかれ義をもつて世されも勇ありわれ急
園のまゝに君又乃今をもまもしたる乃
撰者にさしひ竊に猿炭二集の嶋をさし
いて剞劂に校すて侍りぬ然るに江湖の
諸君子此事を許して一関の目あれなんそれか

管見摸象の説を然て重ねて正中乃確
論を著しゆかんことをさあらハ此弁のふて
かゝるらも豈その道ゟ忠ありとせさらんや元
小子ゟ素志なりと云
寛政五癸丑少し睦月日

辨古集大綱

抑も誹諧の二字を以て延喜の御代紀古今集ニ濫觴
して和哥の一躰とハなりけるとそさて其后よりその
式を緩して百韻を綴り子句を綴らねそめしより
日東和らかなる隅ゟて文明長享の比よもありけるのち
哉辞の宗匠ありて云語の巧よ人を驚せ造化の妙よ我
を楽されハ真ゟ実いまた全からぬといふへしさるも
昭代文物の盛なるにいたりて宗祖芭蕉の翁伊賀ニ産
し武陵ニ隠遁して漢土の史記ニ漱文ある多部の曲の
俳諧をおこし言偏と人偏とを家とわけてあつからふ

西風を弘め行ふ其道たるや儒佛老荘の玄奥を抜擢し
て諧謔諷諫に一流を立れバ第一世情の人和よりなし
きハ俳諧の名をたゞしく寂しきに風雅の趣をたもつべし
そも此三條の家訓ハこれ白馬に建門の大事なるよし
まして當門にも同するんで耳にゆずりといへる姿先情
後の教あれバ新竄の差別ハ明なり法ハよし新式
法傘のむかしを改めバ俗中の雅をいさなひ雅ひしより
つ業有にあり年に至ひころて遠きハ椎の葉乃糧と
信ずる道きハ杏花の酒を換えて三日の影を追ひ欣
といふとなりしとてさるより廣く同好の藻詞を集め

連席の奇行を録して梓に鏤る物今なほ存せり終に
百載の下古人の心肝を窺ひ翁の翁たる所以をしることも是
みるべし至らバあらんやされバ獅子菴ハ其世に親炙して
いふも更也黄鶴已作の宗師とても流行変化ハ時に任
されどたゞ此術けによしとおもひといふ志なるに社中乃
風俗をなんするハ古集の事もまきかへ猶もてなれ
ぬ此事ありといふ今世の俳諧をきけバ姿先情後の論に及バ
浮世めきたることに流れて専ら風雅の趣をうしなへる滿し
ことにおのれになしくに諺ふ人もなき詞の古雅を
学ひて松風蘿月の趣ハ佗れとあはれ俳諧の名とよせる

わりことなハたとくれさらんいつれも此道の大本なる三傑の
遺法なれハ差ありといふへしこれらハいふまてもなくを称して今を
論るの新意見ありて圓随をとられて古案をよ
むに便あるものの説によりてあるて変る編ん
然る先性好の一論ハ一道興隆の基にして先哲の遺訓に奉
されハ既にいつれも尊ふされと句ことに方圓地並乃形
あることのことにあらんねならなを兼もあれハいふそやことなんも
ふみなりしかしそもく附合に臨むに法あるとなて家
句ととなる時ハ眼飛して隠して面するれハ附句の趣向
を求るを性も当座とさせることし句作ハ文字に趣向なる

事物の姿とそのままにいひ出れハ造化の自然に叶ひて深
くり尾大ふの耳にも近つくんそことを称よ兼思量と
いひ俳家に曽なふとといひて其ふに向上の一路なしといへるも
分別にてはなるハ忽怪附の形路に落なん左此論の左
談するを人の分別の無分別にてけ人の無分別乃分
別なるも得と不得との説ハ地によれハ二十年の禁裁ぬ
扇りてたまりて鼻息を通ふへしまて附合の情と
いへるハ前句に附句を称して探する中に合あるものに
して是を餘情といふなり全く一句のうくにつつくへき
ふあるハ実に先様の左理をも信せさらんや但なる句ハ

物に感じて言に発するを感即余情となりて言即
姿を述れハ一句のうへに姿情と備りて余情の生んするに
似されと情ハ万物一情にして其趣く姿に随ひて趣くの
情を生されハ先師におゐてハ一貫と志るべしとて情附
といふものハ昭和にて形めやすき姿の附句をさし玉て
発句のうへに情をあらぬ己か情の物好と述れハ人の耳
へハ響えぬかうとんかくる京諸を好むとハ情に私乃
ひ自味あれならし是を雅して湿覚とも称すれとも
以り誹に姿に随ひて情に深かるに好みたる所を廃して凡
とかさしひかして世法に五備の交も此一際に[illegible]

諸家諷諭の俳諧をもて天下の一助と称するも宜なる哉
虚實ハ即 陰陽の両儀にして俳諧の根源なり 附合ハ
離れ難き種ありて次されハ其底の虚實を弁せすしてハ
如何そ附句の趣向を定むへき是ハ今日の急用なる事を志る
盈しゝ弁ゆるや変通其方あつて徹底其理に明
なるされハ遂ひやすし二三子爰に精神を厲まして
百錬千搬せさんや扨附句への附合をうるに句勢ヶ
虚實あれハ句意の虚実ありて四折八面と流るならり
されと此句勢の虚実をとらハ先師名家の詩論にも其名
目を顕し説されハ肌を得さる人もあるへし さらハ文字に

虚字實字のごとき句躰ニ動静の始あることをいふなり
さて其句意の虚実をよく周旋し人の志る所ニして
これら変化ニ一巻を貫ぬけん講するニ一定をもて尽し
かたきより 躰用 親疎 換骨 与奪 其場の機変ニ應し
ては猶多くもいひなせれと皆其虚実の換名なるを
知るへし其れハ此句意も句作も虚実ハ本より同断なれハ
附ハるや一般にして越の主躰の虚実なる所ハ附合の主躰と
虚なりしめ實なる所ハ又虚なる其むる業様の運ひハ常
なれハ論するも益なきん虚実と説き裏くとなくなる
此等のことひにいつれてハ初心の人ハ豈惑ハさんや

ここに虚を附ぬれハ其虚にかはりて實ニ変る
其ぬる所ハ其實忽ち虚となるの妙古集ニむかひて益あるへし
虚実を轍まへし識ニ十論ニ口傳とあるせる虚實の虚実も
此ふるにて言語不到の所なるとかくあらハ説破する附合
未熟の族のひたふるとなりて却て道を害するニ至るまし
めらとなせる附合ニ其意を増すとも古集の虚実ハ融
通しかたからん彼の廬居士か遺言なるも露いくハ其の所着を
空して而無も其まことを失へりとハいへるなるとそ
変化を地と先とし節と添へし曲を其中の變相なりと
一巻の配りといへるなるんそも附合の変化ニ至りてハ百韻の

有ることを趣と識得せざれば句面の實に滞て古集の
新しき趣をかかんには変化は附けのことにして其変化
の骨肉といへん雲大名の有趣に雅活飛と新向し青山秋氣の
とひしとの思濃に転ずるも其もやうの変化なりしの
其変化の皮毛とならず志あるは社中の附合をとるべき
其人倫の三句目といへば猿蓑抄の虎馬子のりて未練の
言謂にあやまりぬるを見雑も無もなし山や川をも
様も隠く時を是非をみ田へいれんとして其自然と
変化とくは自己の趣掛より運びて親矩の定れるなるら
なく我書詠や不知火の志しぬ毫ことても此次はとあらん

其次もかはらんを思ふに差りぬまのゝ繆あらし是ぞ
人はあしさめりこれらの弊も皮毛の変化を専務として
越の余識の偏屈にありまするより紀行るなるんいはんや
貞享の古今抄にも要あり風姿への迷るさへ見るべきく其
さかひより人倫なりさるまじなれば主誰獨なといへる義
たゞひは人倫の噂として人倫をさだめて自他にまちぢ
姿情のたゞひを老しく法則はやまさまに隨ふべしとや
句移の事古集に数在せるものを無に峯て其あまりしを
新しむさは花物といひ比興といひ換骨奪胎の名誇るあれ
對附讓爲の者あるいづれも深く其の文法に殺るかあるは其の

二句をかけて後の一句を付けあるは其の二句を合せて前句
一句に附けるあり変易すべき所は其越ゆれるべし二句一体と
一意一章とは大同小異にして続りきもの根を動かせまじ
八あるへからず次又作付る其の変を毎に用ゆべし多くは危
上古の変化に用ありとこれや是人間交遊の姿情より
山川草樹の風色とても句作やり一句にては捨て和歌乃
上下のあるごとく詩指に起承のあるごとし殊に草紙
物語の面影古詩古哥の裁入とても平生に崩して用
ゆるなと手柄となせれど定しく肴る次第あらん中にも
恋の句や其詞古雅にして其情いやしからん今めきたる

すさぶるを片猿といふしいては季節の抜けぬ第一に自然を
得ることなるひ第二に世界の用あることなるべしさて雑を
挟みて他の季をはけ又此季より彼の季へうつせるのさかひ
いつれも変化の用なるべきを却て是むとするなんあ不へぬる
例に私情の称りしやいかんとも俳諧の論といへりを
醒く嗜翫偏見を始として楼にあへ紅葉を続る横変の
自在をいふも更にかたごとはり家に引あけて其度を
必とせさるものは即古式の趣なるん況やむかしの哥仙式を
二花三月の捉あるより初折の月並かせりしもれはそこに
不思議の作略多し

句作に両風の自然とよふ物の有とぞのまゝに俗談平語
をもていひ述るをこそまことに雅俗とおもへるハあまり
初しくあるハ宗匠の覚束なきより却て勤し
難き事に便あらんとするハ詞花言葉の巧にかゝりて
句として作り物ともなれる思ひ付て已むことに終りの付て
いづれも発句の用をも見あけるも地そせられされば花
なくて賓かろく句形の風体に趣きより絶て随ひんことを
欲して発句のあとに阿を謔つハ二句のあひだ餘情といへる
風雅の優美をあらさるも行しん斷のごとく随意といひ
句作といひてはゞの密なるて翻結するに尾鏡るなれバ

ばかりもちしろをえせて述るがちなる俳諧といふなりけれ
なみに智ありとなへく甚愚の温和を慕ハさんや撰十論
に短句と先として句作を様とすとるそれ発句の姿ハ
同するにて定むべく発句の用を身にかけて季とを結ふ
為られハ之あるるを轉倒して用とをなして趣向とするに対ハ
論するに発句の始ともなるより別にいふの短句ときさへ用
の詞と意ハしして一句と仕立られハ用ら前に餘情とあるて
始の結とものあらずちるも由し
去嫌の事 天象降物儀類のことくひもあるとて門部
あるとや相述きものもとして混しく穿鑿すべきなり

ひとへに私情の温覓といへんまでを則として古集をつゞる人は
却て踈略の罪を課せんとはさらに甚一隅を挙て以りゆゑなし
貞享の式目にまかせ今べし殊に手爾遠波の差をも清濁にまで
申さし音訓に着きて吟声乃耳にとゞむるを詠のよき
ものなりとおもへるとや
斯の如きものは古師の遺稿の秘説より出たりとおもへる人云説の糟粕
に落ることをもとめて当世を譏れりとせらるゝものなれば然
古集をも譏るにひとし儒者といひ医門といひ書画の伎藝
になるまで世をまなびていふ人をも嘲るにいたりて当門の風雅
みなそこなへるやうに紛れて入来る人々のなきもあらんも

いふみるとりわれは之されば伝くのあるまじも猿蓑炭俵
に萬葉をみるやうとならんそれは先師のまゝを綴き着るに
大凡多くの及ぶ所にあらず杖を踰崖に育杖をもとめてなき
翁と屡稀密くは祖翁の熟選なるものはいづれ従容閑
雅にして変化を風雲の移るきざしに晋子の撰述されしに
亜ぐらゐ頌も文玉を砕き錦を裂く中にまじはく
思ふに後なるものありさるは弁論も想像に出れは不審
なくおぼし翁もこれらの撰集を評して越度を悔ゆ
申されしといふるべからず次そて譏るに姿情
の先後は句論あらず姿よりして甚意をさぐるものなり

また情より請これを熟せしめて変化の妙なるにのつとり
味の深長なる事を知らしめて全く古頭の論をへだてあり
新に能とゑらて辯をかくて筆しかく見たりなり
二三子の其藩を窺ひて其室に入らんことを求るの階
梯ならんのミ　豈他の是非を憚らんや　維時天明
五月のとし衣更着のなかば　蔦松子杜哉遅日菴乃
南窓下に題す

俳諧古集之辨　始

羽陽　遅日菴　辨

猿蓑集　去来

鳶の羽も刷(カイツクロ)ぬはつしくれ

きらくしと入りぬ妙なる風情を形容し得たりさびあるをいふも更なり洒落の旨理熟合の斡旋玩味すべし　○刷ハ語八
人情をかりて物の字に新意を述ぶ次

一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉

風雨おさまりての自然をおもひしづまるの趣微中の妙あり　○木乃
葉のあらはにて鳶の枯えを見し訳ある句作に就辭あり

股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆

人倫に於る旅体なり　○此句ハ多く世の人の口にいひふるしたる句なれとも此句ハいさゝか前句の用をかへりみて其にもいはん前句ハ又朝がほとしてうちなめたる巌の縁ありて独よさむき室のうちに味を結へりとも見るとも見ゆへし　○虚実弁男ハ更けて独眠月と奪も三句の境界と詠くたあらそふ運びに数あるものならんとも絶なき古人ハ此下名目を茸に逝きあた

たぬきをおどす篠張の弓　史邦

山畠かせぐ男とみえて肩に乗たる弓と云ふ即仕場へ立るの鳥附たる所趣き旧句自賛りとすへし

まいら戸に蔦這かゝる宵の月　蕉

射出したるおとしと変る山流の住居なることを云

人にもくれず名物の梨子　来

貧乏なる心からく行する庭のかけての庭に柑子の木の枝もたわみなりけるをまわりを厳しからしく此木なからましかはとかなしかりけん

いはゆる面影と合めるなり　○去来て句作を数ふるやすき事もあるへき先句の句と付句との捻中をよまふへし

書なぐる墨絵おかしく秋くれて　邦

菓子盆の梨子に移れ　○蕉よりある書を添て世を懸にてかへる隠者なといはん居にも名物画なひきておかし

はきごゝろよきめりやすの足袋　兆

此二句自他ハかれすとみえても梨子の句は茶を隠者あるより住をはきてそめ蕉をとりてある様を初しく二句一体に作りて奪ひ移れり見ても奪ふの附と云べく　○与奪ハ旧句よりして中二句の掛挑より出る其埴輪の法の定らさるに似たれと草臥ゑりへきまめと無

何事も無言の内はしづかなり　来

茶席を詠とみて足袋の用をあ夜勤行止観なとの久しく席となることより移り紙を惜れる句作のちからをとらへし

里見えそめて午の貝ふく　兆

貝ハ午時を報するに　○比叡なる厳なとにある静かの地を下れる風情なれと忽ちに浮世の音の耳に入る按排余情あり動しきたる手際也

更ゞ山寺とうつしぬる里の一字妙なり

ほつれたる去年のねござのしたゝるく　兆

家まハ菊が需なとの勝ふるとみて而あ趣いへるや ○ 或説 古と牛
字あるか磨滅して午字となれるか志らず但すむ里に牛乃
咽を転じて詠んじる老の侍るか又賊らで見ゆる以為といふと
こゝにさあれバ変化といひ瓶中にて手柄あり

芙蓉の花のはら〳〵とちる　邦

芙蓉なまちるといひ又水を添へて蓮なり ○ 畫弟の物あはまくて
て涌池なとへ落かゝるにちりぬる分ちりしるん浄樣のとり合せいとおかし

吸物ハ先出来されしすいせんじ　蕉

水仙寺ハ海苔の名にして肥後の産物とて蓮らん寺の名とあれ
ともこゝにはまさる事なるべき

三里あまりの道かゝえける　来

勝とりてめいひくなるの意にて転じ先の字をとゞめていへり

この春も盧同が男居なりにて　邦

借家る者といひて前居の人と居同じをあらせり二句からみの詠とさる
者し ○ 盧同を唐朝の家来の作者なり

さし木つきたる月の朧夜　兆

かれぬさし付る枝の芽出せし風情なるん居なりに付きしるを
自らまかふし

苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉

花ハさし木も咲るなるや並ぶは比肩の意なり

ひとり直りし今朝の腹だち　来

詠地の手入をするものにて務めるを味とするや

いちどきに二日の物も喰て置　兆

与奪なり ○ ひとりの語に眼をつけて車力日傭の族なる乾
やもめ男の風情に附なせり句作の影響とも見るべし

雲ちるにさむき鴫の心かな　邦

驍勇なる流され人なとゝみえ侍らん変化あるへし

火ともしに暮れは帰る男かな　来

辛労なることありて用の済けるか

ほとゝきすそこか峠の佐夜より　蕉

寂寞としてよし ○ かく穀の句を越ゆるものゝ又他の季にもうつせる ものにも書る句を換骨するの所感して古説の論あり言葉に就て 例とすへし 但換骨の子細ハ次にいふへし

痩骨のまた起るを添力なき　邦

時候のうつりゆくに病を歎く意なり

踏をかりて車川こむ　兆

旅のなさけに送られきたるを延ひやるまてなるへし　男子もあまた見えたらん

うき人を枳殻垣よりくゝらせん　蕉

流やきへよせたるを移してひそかにみて以前とのへられたらん　媚いふなるなり　古双紙物語の風流をうつされし○ 此所騒客も貴人に見てあまり卿くしき句を作るに等しからんハ別に是に同しきの理勿論にして越の食議に取るとあらんを換骨の所とん

いまや別れの刀さしあす　来

落人なとかくまひある女の館へ捕手の向ふ風情とも見入ると見るに換骨せし手際妙也 但自他にわたれん所よしといはん

せりしなに檽て取るかきたりし　兆

よき事なり ○ 貴女に余波を惜しある木曽殿の面影なといはん

あらひ切なる死ぬるひまんよ　邦

此四句ならひにいられて左右ともに二句一所なれハ人倫の去嫌といはん次第に力論にあつかる勇士の去嫌をとりてわかるあまりの二字ハあのつくる又かな程

軽き韻を与へて劉楽相ハなし揺曳踊味をなし此妙や定中
の趣ならひて反宿行の曲意を寄せる意味も此意外に
もとあんや ○ 二句一節ハ平生一意一筆とても歩戟を論ずる
かゝる次第通式なり

青天に有明月の朝ぼらけ　来

湖水の秋の比良のはつ霜　蕉

去来の詞勢にある句と趣向き優游の二句に急迫の情を与へと
なり

柴の戸や蕎麦盗れて歌をよむ　邦

前句の随の秋寄に似たる所より趣向しきたらん ○ 柴の戸ハ五文字に
姿をとりあひおかしきは文辞を崩せり

ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ　兆

かくのごとく理るに至るまで語るにもなきまゝ以下毎辞を加へず

押合て寝ては又立つ仮枕　蕉

習ふの語に情を移し夕暮の二字に眼を注けて今まゐりの出女房といへる
まとめ仮枕とハ旅中の趣向なるべし餘ハなお其所に委しく句作に示す
もとあて新古の差と見ゆるや前句に背くその沙汰もありとぞ

たゝらの雲のまだ赤き空　来

鍛冶の大郎新出ところにて光景をいれと夏に時分の語をとらん 次
○平語にたゝら雲の名あるは但天地之間猶橐籥乎と云ふ所
古語によれる名なるべし

一構鞦つくる窓のはな　兆

鍛錬の火気のうつれるを移して鞦鞍師の店前に迫るへき様為
むかしの風情をよせたらん

枇杷の古葉に木芽もえたつ　邦

一木一艸を以てするも姿をとるる信あり

○

凡兆

市中は物のにほひや夏の月　凡兆

夏秋のよ静なるを見るべし○市のうち風塵を厭ふ趣をあり
て志気あるし

あつしあつしと門々の声　芭蕉

暑きにあふ句の余情をとらへて月おもしろき門涼をいへる
なるべし二句相照して新なる趣なり

二番草取りも果さず穂に出て　去来

稲を離れて果もの用をとり秋初節と登載して時に

灰うちたゝくうるめ一枚　兆

いそがしき時の有様農家の趣を見せたり

此筋は銀も見しらず不自由さよ　蕉

奥に至りて本意ありぬと見るにや

たゞとひやうしに長き脇指　来

旅客の姿にしてとひやうしの詞をうつし三句に自他の変とれ

草むらに蛙こはがる夕まぐれ　兆

換骨の附なり○かゝる物おぢする小僕の風情なるところ伊達なら
しく変化自然なり謂つべし

蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉

上を奪ひてあと女に転じられん婦の態をうつせし

道心のおこりは花のつぼむ時　来

此句は女を観じて剃髪しける趣なると見て
えて證拠をなし前句の二句一意にして其の論なし

能登の七尾の冬は住うき　兆

其句を識悔ありとてみさすめ他々の人の趣ありとてかく然し
いふるや左附しくの究さりとつくるへし　今も時の流行来るもひく
きまて補足にゆるし　○　李子吾と隣るく変化の由すりてさらも余
情あり

魚の骨しハぶる迄乃老を見て　蕉

言ハ昔の人とさらしむ且さびあり魚の字ハ由他と明ミもる乃
用とするなし

待人いれし小御門の鎰　来

奥向乃門番ニ附なせり

立かゝり屏風を倒す女子共　兆

自他ハ更ニ迷儀の情をあらへる姿との差別あり

湯殿ハ竹の簀子侘しき　蕉

其場を湯よりといへんさびミ静しくさらも自然ニ浅さるの化飯あり
○越ハ鎰の字ニて居所を曖り候

茴香の実を吹落す夕あらし　来

さびをさそく

僧やゝさむく寺にかへるか　兆

猿引のさると世を経る秋の月　蕉

異様のものをなつかしくて情態あらハにうつす意を對附にいふ可し
詩文ニ對句あるかごとく一毫のもやうなかるべん　○　此句ハ月乃
用あらハれ夕嵐ニ締なり

年ニ一斗乃地子はかるや　来

それゝの身の寄る公役ニ免れさるの世をいふるや

五六本生木つけたる瀦(ミヅタマリ)　兆

地子となるの地水精の設なとをゆ但一夜の語ニ出川

足袋ふみよごす黒ぼこの道　蕉

追たてて早き御馬の刀持　来

でつちが荷ふ水こぼしたり　兆

二句一躰となりて附たるなり

戸障子もむしろがこひの売屋敷　蕉

興ありて味ひあり

てんじやうまもりいつか色づく　来

あかゝりたるをも志らぬ程なるかれが秋をしる風情なり
し　右番椒なるべし

こそこそと草鞋を作る月夜ざし　兆

掛とりて番する風情をいへるや

蚤をふるひに起し初秋　蕉

後附なり老農のさまなるか　○うし後附を附句より吟して
前句を味ひみるべし　以下倣之

そのままにころび落たる升落　来

此句ふたつにハわかれてどちらも数多の一躰となれる去嫌を外せぬ次第
よき寄なり但三句去物ハ三句はなれての説あれどさまなれとも変化なり
しかられ　○後附なる事のさまを次第にいへる附ハ難路なるものある
より寄に論すし先を一例とあるべし

ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆

ふたの合ぬハ嵐の風も志るさを辞して世に形をなる庵の意に
起りて俳句を附られしか

草庵に暫く居ては打やぶり　蕉

是をもいひ出るなるべし

いのち嬉しき撰集のさた　来

頓阿西行なとの流落を見て附られん

さまさまに品かはりたる恋をして　兆

与奪なり ○ 前句を小町が老情とみて初て見所あり
花の色もうつろひ果し頬をとられと心あまりて詞たらぬ情句に
甚あるを附けて補ひたる手際妙あり

浮世の果はみな小町なり　蕉

二句一意にして句作に生死の術あり

なに故ぞ粥すするにも涙くみ　来

謡にいへる老女の振舞なるへしゆへしと思ふ妙余情浅
からん但向附にして自他を明すなり

御留守となれは広き板敷　兆

左遷の謫居なとか往昔をしのひし風情なるへし出家して籠る妙
あり但かくいへは嘆息の意をおこすに似たれと只その人の留守と

云へる句面の設に論なからん

手のひらに虱這はする花のかけ　蕉

句面の設に論なしといへると左近のさし出る言葉とみるへく事に変化と
附られし塩梅虚実の変化を見へくして奪胎換骨の附なるへし

かすみうこかぬ昼のねむたさ　来

旅する人も見ていへるや

○

凡兆

灰汁(アク)桶の雫やみけりきりきりす

取合に雅俗あり ○ きりきりすの寂寞の静寞なるところをおもひ
えたらん

あるかたりて雪を得つまる　秋　芭蕉

一句にて混せ侍ニつゝく韻ゑに

新らしき露をかゝしる月影　野水

夜分の斟酌より後附の二句一躰とせりされともさびを轉侍
○移徒また人の家ちゃあるゝ時るの侭借なとはいへきもやうかうん

なかんて嫁し十乃きち侍き　去来

与奪して甚だ卿食客のふせいをいれと人倫とへ志思せり

千代経へき物をさるく子の日して　蕉

子をまうけるとは国饒し素のて雲上の推移なるん時分の事あ
る轉せり本句とえなふ不凡なりとといふへし

鶯の声をたひし西か婦ほ　兆

小松か原とこして雪をといりそん　○　前句ハ文雅にして和らく
後句ハ武備にして疎し

ふゐ出して肱に汀まる春の泊　来

遠きにもきかへし

摩耶かるる根に雲の乃かゝれる　水

ある人云句の意を移れ思ふに此うれるの縁ハ馬上にきくつと見
侍ける以為ありてぬるゑにてまてる山のゑとも国越の無用なるまて
比せ侍　○　摩耶ハ津の国にして古禁の地なり

ゆかめし今かますこ吟へハ風薫る　兆

夏雲の光気とえんて言ねおろしをとゝるや自然にしてあ
さびあり

蛭の口所（クイト）をかきて気味よき　蕉

貴とるく賤となく通せへとといふへきあるし

もの和ひかふもとふれて休む日に　水

うし絵附の二句一章也 ○ 由良の古丈か臺所なとゝ見るへし

迎せはしき殿よりのふみ　来

是婦てあまひとつんで享主云の宿下りに附たるなり与奪して前
却てこれさへ一意と次

金鍔と人によはるゝ身のやすさ　蕉

我か雛倖によろうて他の不偶をうらやむ境払たる一術人に
ひたる々才の轨迹なる云語の表裏を寄せさりんやさハ實なし
隣せらるの手段もあるへし右前句を男子まへ句両ハ自他に
入るてあり ○ 金鍔とハ人と和せさる者の世話なり

あつ風呂ずきの宵々の月　兆

金鍔の語を翻却して煎茶の味ひさへ知ぬ野親仁に附たるなり

町内の秋も更ゆく明やしき　来

めつらしき風呂を捜しあるきて世間に借てくの熱意も秋の字を
かりてひらかせたる手段なるへし

何を見るにも露ばかり也　水

町も寺ひとつ淋しき折なるを云ふに一句の明屋敷とつゞけ
て物のあはれ風情をあらはせり昂二句一揃と見るへし

花とちる身は西念か衣着て　蕉

なまき人時めきたる人なとの跡の果なしきなとの事にて定なき世
を観せし話に前句を転しあてり且季をうつりの自然なるをとるへし

木曾の酢茎に春もくれつゝ　兆

花とちるの風流より無数にハ転向せしかひとへ世を捨たるに
もまあるるとありて木曽の麻衣あさくのきと云ふる一首を翻
せられて宋秀すして気付けり

かへるやら山陰伝ふ四十雀　水

柴さす家のむねをからげる　来

前をまへ渡るゝ間あり山陰に茅屋は移り云せさる人を
木曾に柴垣を構ひもせん

冬空のあれに成たる北風　兆

旅の馳走に有明しをく　蕉

さびしき旅寝せり

すさまじき女の智恵もはかなくて　来

枕双紙に清少納言宮に随ひまゐらせて生昌が家にやどりし時于定國が好ることなど言て門の狭きを難じその声をとがめてなるや悦臺のひろきあしらひに思ひ入れたることあり　かゝる風流なる女も越中しら光枕中の詩桜をとしかるべし

何おもひくさ狼のなく　水

比奥の附ありて二句一意なり

夕月夜岡の萱屋の御廟守る　蕉

前句を霊として佛出へき風情をとれり

人もわすれしあかそぶの水　兆

閼伽僧なるや

うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水

閼伽桶の雫しきりにて思ひやりたる言なんにや二句なるを考ふべし

又も大事の鮓を取出す　来

前僧の人なづきをやり僧上男と云由

堤より田の青やぎていさぎよき　兆

鮓このけのもやうに轉せり

加茂の社はよき社なり　蕉

そこに長堤ありて盛なるべし

物うりの尻聲たかく名乗すて　来

此句を得て初宜の面影乃かはりてなつかしく思ひゐるよし云ふ事に世俗の俳諧師も名乗の時に古郷を捕るらん

雨のやとり無常迅速　水

晴てこち行すきりもて一樹の陰乃名残りもあはれなく已うきゆくにハわれちるを観せし趣に似たりせり

晝顔に米搗る涼の身ならふとさよ　蕉

古越の斟酌より晴るまつ雲納の面壁を比喩しなやさて人間の五十年も一むかしの夢のまゝとして世にはなれハるをとそらるゝ事業の境界を業のなき味はふへし是れらの不心禿筆の及さる所を見きてあわれなる人の自知を為して

志のうくみに蘭のそよくらん　兆

窓に諭として隔る地底比喩るの證とすへし

魚さへも猿もひに咲けより　来

當門の正義論に曰花ハ桜にあらは桜にあらさるもなし次と称せよ此さくらを花にあらはとせん一義をあけりきて吾か花にして又なあり桜あるはあらさるもならぬとせん三態とありて二ツに哥仙乃公式を闕へし去りしあるそこに秘訣の大事あれとも傳へさる人のこゝろに論するもよしあるらんかへ猿みのいふに咲るとも撰去に此集の自讃とみるへし

春の三月あさ?のゝ空　水

うつりゆくくもし　次

○

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉

前遂の表ゟを思ひうつやめるさたうん無人合の五無要ハ更ニ句
作の旅姿ともあるへし但もりしハ挨拶雑あらも幽玄をもてもとと
あさまれハ雑ゟして心ゟし ○ 其菜ニ結ゟ生涯のこと古今
抄ニ出されハ云ゟ略す

笠あらゝしき春の柳かの　乙州
多岐ニ倚ゟハ住とら不るし

雲雀なく小田ニ土もつ境かれや　珎碩
前書の見られる風情ニ静し句弁の虚実ニ変あり雑ゟう
新しきのことも道さ故といいん ○ 此やの子捨やと称して

あさき祝ふて下されよかり　素男
梁ハ浄菜ニて作れる餅なり但火を用ゐすして祭ニ備る物なれハ
社日なとニ謂ひし附なるへし

片隅ニ虫歯かゝへく菊の月　劦
其そハけも哉うきつらん

二階の客ハたゝれよれ秋　蕉
秋の一字ハ真ニ惜しく別漏し人の立ゐる余情あり客句の姿
の身まゝはりしあまりくまなと思へるふせいあれハ句体ニても
めしるる手向屋の女なとと見ゆ思ひやるへし

放やるうつらの跡ハ見えもせす　男
世界の名を聞門の附なるうそれハ庵のあたりきて鶉を放さるなり句作の
うつり此徹中なるかくまひ損せし余情を見ゆ惑をもて実を取となれり

稲の葉のひやひや力なきこの勢　碩
平田杳ゟとして見送しき風色なるん実をもて虚をとめり
めり

ひつきんの御幸ニ鏡る錦廉山　蕉
うしなふニひゝく風情ゟるものの語ニ出り　刈萱西行
あとの面影をもなるへし

因果らさ吾婦郷ハさたれ　劦

惡まれぬの長き事なかんなり白き容貌下に隠るゝことし 似京
家の人とも見えて此名を寄せるや

卯の刻の箕の手に並ふ小西方 碩

陣を布る躰なり ○小西ハ氏なり ○前句の語録を人
かかもとりぬ拵ほとみていふなるらん

すみきる松の静なりけり 男

驟姚か軍に似より静の字妙なり

萩の札すゝきの札によみなして 刕

苑中を見ありく躰ならん

雀かたよる百舌鳥の一聲 知月

枝を弄せるの塩梅と前句を起していきほひあるさまを見うたり
好ける躰の近きより此奥せしか

懐に手をあたゝむる秋の月 凡兆

是も又前句を起して男立の棟梁なと呼るゝまて手下に覆せるよそ
あれひをいへるや

汐さたまらぬ外の海つら 刕

海士や船人の手業を寫す様子とも見ゆ

鑓の柄に立すかりたる花のくれ 去来

渡海せし勇士のもやうなと見るへきか ○前句に對附あるを無難
なれハ今かく此月花ハ端附して句讀を知波ともに解きなん設法
まるにて位あるらんか

灰まきちらすからし菜の跡 兆

門かるゝひろみなる供人の風情を移して ○即ち前句ちらす
躰なり左時宜か附して用隣の事をいふへし

春の日に仕舞てかへる經机 正秀

灰をいふよりの言多くして納用の事あり

店屋物にも佛の手をかりけり　来

敢て佛の傍にもよらさるは法華八講なとの請の車もさしたとひきなん

汗ぬくひ鏡のしるし紺の糸　半残

いひ事に庵の余情なるへし

わすれぜりしき雛が下　土芳

忘れ物と見てせりしきとは作りの餘情面白かるへし

大猿に思ひわすれぬ恋をとして　残

前句を観音の脇士となせり

身はぬれ衣のこひにあき　芳

うつくしき女のさほうなきん二句一意といふへし叶ぬ意なるは
換骨して折越の論なし

小刀の蛤ひらく細工かな　残

波匝を細工と唱え蛤の毛を刈刀の姿なりとぞ前栽せしものゝ作意なせり

棚に火ともす須广の大年の夜　園風

素人の細工箱に部品を引出しにて前句を見る句作なり

そもじは都の便も須广の浦　猿雖

毎逢佳節倍思親といへる類ひ似たりさまよひ人なるへし
○源氏須广の巻に渡てもと立ちわびしてとあり

むかしから今夢見るかくされぬ　残

さまよ人の形状を見て作を憂愁を拂くめる句作の妙をえたるへし

この夏もかゝゆをたつる破扇　風

世俗の餘情を無せぬ青雲の志とも見けれは空く月日の流るゝを歎く
言ありさかは顔政の椎に掛してわかひを述られし句に感せり

但かくの如きハ連俳の意をおぼえずハ似たれと深く心して見る時ハいさゝか
其論に能かなふべし

醤油ねさせてしまし月の原　　雛

これらハ現に人態をあ越てさし当りの差別ハいふも更に情を姿に
換骨せし附也姿をこゝろ高尚にして却て意に情をふくませる
例に云事の自在をやいふん此三句ふて悲ある余波の花也三句と
同法

咲声の障ハちかき椽はらひ　　芳

涼しさを含りひとり嘯きて涼るをみて人静まりし
光景をいへり

涼しくハなるかとこくめんな顔　　風

こくめんハ柔順の貌 ○ 前句の様相に情を起して奴をとらぬ
女房をいへり意に附意の理不理を案ずべし意ハ許用なり

形なき絵を習ひける会津盃　　嵐蘭

塗師の弟子と新しく習ふとも侍らん

うす雪かゝる竹の割下駄　　史邦

前句をうけん ○ 竹は前書今く前後のうつりを見るべし

花に又ことしの連も定らず　　野水

此下駄を雅人の具となして云捨ふるよりなりしや所謂の山乃
吟行とも心得るかゝる以前をいふなるべし銭の句乃句とならべし

鮎のなますを流る春風　　羽紅

女中に換てむ又男子のふせいといへり句作ハ古事のうち入なるん

俳諧古集之辨　始

俳諧古集之辨　中

羽陽　遅日菴　辨

續猿蓑集　　芭蕉

八九間そらて雨ふる柳かな

見立の句也更に風情の添りなし○此句くハ桜の雪と空にしられぬとよめる紀貫之の和哥に倣して雨天の差別を顕ハせりともいへりとそ

春雨かしこの畠ふる春　　沾圃

融こそ春色なり俗中に雅あり

初草る馬子も好その羽織きて　　馬莧

在口なる風情もろくし

肉ありき冷く晩の始るまひ　里圃

揺なけに酒いりさてあやうかりん振舞の趣向折を得たり

きのふから日和さだまる月の色　沾圃

時分を転せり

狗脊かれく肌さむしちる萩　蕉

空くれて雲あさを傳ふ晩秋のうつりきなるん

渋柿もまじ八風に吹れをり　里

對附あり　○月下に二物ありて妨あん左残月の光景をいりん

孫が読る證文の借錢　覧

俳諧にまさる世情とたるべし

腰指て都しかりる旅刀　蕉

人まかしとうるまくらるん　○虚実の趣也則とたへし

煤とらまくらや餅の飯　沾

正月ちかき餅をつくりて旅人を示しかるの意に転じ手段奇之

約束の小者一まけ賣に来て　覧

十里ばかりの余所へ出かかり　里

不都合なる餅を附たるに餘情あり意味に死法を味ふべし　枝
あるかるを不快なる意に転じ即変なり

笹の葉ふに小路埋てあたしろき　沾

郊外へうてうし出せり

行あらりかと門の出かけ　蕉

蒋詡が竹下の三逕とふまへて趣向しなるや幽静かぎりなくあはれに又妙なり

以清くへり清ハ沙汰なき錫坊主　里

扇ハ蔦にまとはれなから茶室の説きにもやうして折ふしき風情なるへし

やがて出す京の道法れ　萈

居梅の忘れたると辞して君ねの目もくき以為をいふ　さハ上七文字の云釈にて知るべし

互脈に吹くる露のはてあいて　蕉

秋虫の声しきに隣る夕ありとてあはれ風色をたへなるなん

見るまゝそろふ籾かきく口　沾

蒔んとて芽出しの籾をみつるなんとのたん秋意に趣ろまもの　ことて自然に月花を結べり

春雨ふる中の落札ハ作左丈　萈

梅の諸より無言語を趣向せしが苗代とみてかれが仕合を算へる論梅あり

伊勢の下向に亜つくりと連ふ　里

うらの所なり　○　其句を達みての物語とたせり

手拭に小草の仲見ちらくと　沾

女子法れとみてそハ清くよいへり是の賀まりの諸より趣向せしなら事として稲句新の高意も妙あり

くりぐりと空の晴る　青雲　蕉

新用の意あり前語の餘情をいへり

禅寺に一日あそぶ砂の上　里

世塵を忘れて静寂なる心あるに座せり　蓋詩文の徒なるらん　○砂のうへ比語晴天を結び遠とのくるの余情なり

櫬乃角のきてぬ　買究　萈

遊ふの一字を換骨して手侍の事やうに陥らせり

濱出しの牛に俵をそえてぬるなり　蕉

きのふとみゆる旨人にて頬白ゆきくまる垢稀に微中の場あり

なれぬ嫁にはかくす内證　沾

さしといへる物をとりて運送に米を採るありとて

月待に傍輩衆のうち揃ひ　莧

武門に表を飾るの意味あるなし　但附意を引たるに似たれと自他に論あり

籬の菊の名乗さまく　里

ちぎりみかし

むれて来て栗も榎もむくの声　沾

伴僧はしる駕のわき　蕉

つやの樹木とみえて栗鳥にまろむといぎやかなれに寺門の風あるとも言まとめし

削やうな長刀坂の冬の風　里

走るの用あり　○坂の名にてうち物を思ひ出せり

まぶるさに星のこぼれかゝる枯の原　莧

秋のあはれを尋ねて文殊の心をば取寄し得たり

引立て無理に舞するたをやかさ　蕉

起情あり　○鎌倉に籠る静女が面影あるといへる愁を娵らしき嫁態の趣にそへたり

そゞろと火入におとし薫　沾

ある人あり艶情なるべし

花にさへや知らぬ妻の出くれて　覧

　志ゆやかなる風情相應せり おゆうしき附句ともいふべし

瀬かしらの月もかろ〱の水

　今は似つかはしといふや

○

馬覧

雀の宿やおさへていろ〱の聲

　上五曲あり 俳味更になし

てり葉の岸のおもしろき月　沾圃

　面白きの詰句をうけし彩月の形容とこのまゝ称らるゝ紅白のならひあるを

立家を買て入れは秋くれて　里圃

　都会の地かくれなくてもつかいかなく見ゆて寂を好き景色を愛して移居せるなるべん ○此附二句ともにいふべし 老後の情に移す

婦りしくるをのそく甘酒　覧

　まつしき暮らしを知るなるん 北越の移に歎せり

更れ上手な藝 呑子も又六人　沾

　早践の活を表せり 新句なり

むしろを敷て分ね洗足　里

　旅屋の新たなり ○会すして居る姿なれは更に初くの句 なりしと見ゆるかよく尊くして附たり

梅しさへ寺の一歩ひ見えてなし　覧

市仕舞の後ともみえざらん翫句ありて社句弥よ一意ある事あり

請状んで走り歩行　沾

自他の意之　○下女や小僕の業にも一等風情なるべし

よそきなる筆紙の下書きかはし　里

摘子世川のあそびん　○走らする飛脚の言語と見るべし

まかり出る鬼方の客　覧

翁自和と見て起情に業せりさハ翫ムる見るが説をあくまでかゝる差なるん　○起情ハ換骨の意にして古哉を論せさるの例あり

何をもちてめでたき駒迎　沾

鬼方といへるは京の詞と見て熟田せしが其家にも茶飾ありて出たらん　○句作は反對あり面白しと申すなり

風よ吹する早稲の穂に目　里

田舎に静かにして通りし跡の静かなる様子をいへり　○助りの稲よかけて見るべし又無事の證ならん

甚不秋の往来にすくひて　覧

宰相のむすめて女房呼かけ　沾

百姓にある風流ならん二句一意の俳諧寄とも云べし

明らかる伊勢の本縁の書てあり　里

夫婦を只今見かけたる風情ならんぬく

暮ちたち衆人のあらぬ一徳　覧

若て涼しき人のありしなるべし

俵米も売りて少さき花さかり　沾

雨とかゝりて暮の寒八の子情より近句の手段をとるべし

書きつらね筆の海縕　里

　揚ことひの邪亭なるや静ハまありのうつりもこゆ

箒の跡も雪を掃のこし　莧

　手箒ハしるし門戸の景縁ともつゞくんハ新らしく其なるも道あるべし静の字まで含ん庭せり

まろぬ合点で野ふて居る　沾

　掃のこし語録より快き日のあつさともいへるや

遠くに居るちの者と中悪く　里

　掃除とみて年くとあらそひ様見ゆる言葉あるより中悪くといへるやかゝる人あるところなし

三崎敦賀の荷のかさむ也　莧

　今津海津の舟問屋に生代まじなる家物あやちともいへるへしくらん
　○塩賀の本ハ能越前の津なり

汁の実にこまる茄子の出盛りて　沾

　家々の郎手場ありて辺今之き時節をいへるや尤同じ乃まかりのん句作あるべし

あらむ麦をまつ刈てとる　里

　在所の風情に転じて

口くまて寺の指図を出直し　莧

　刈跡へ建るならん先の字よく見るべし

殿の府乃あはれ淋しき　沾

　替くもうつろふ

誂りてまちに流るゝ小商　里

　お留守場下に転せり

卑下して座によい料理なし　蒐

久蔵自のうちぬくしくきる人の方によりたる新なるを
し座に置わざといへり

肌寒て秋よなりたり夢の月　沾

顔すりとなりる玉笹の露　里

月よあそぶ酒さるる酒とよせひやゝかなる情を結ひて新月の
意あり

この盃で女の母やあと問て　蒐

起情なり　○久しぬりそ墓まゐりせし娘のこゝろいひ
あらはしたり

又も住はてゆく出羽の庄内　沾

年ごろ流浪し家なき武士とおもふべし　○起情へとうつる
まで論なし　文字の一体といはん

世のさまや帷子時のうしい物　里

新月なり

聞て居ればさき杉苗の風　蒐

若井のふぜいを含めり

花の香の巣をとる雛子の声くり　沾

いさましく峰の余情ありて上七文字にて響なり

落る日の出やかりくがわる後ふ　里

○

里圃

いまさら川魔ありきゆる嵐かな

冬のまさ姿の霜あらし兎　沾圃

草枯鷹眼疾といへる風情ありて蓋鳥嵐ともいふべし一本章
きこえ前聯の痕をうけ次

大根のそだゝぬ土に嫁入れて　芭蕉

賀物に转せり　○大根引る頃合とうたひ初ては秋中の句作に
待得生得の用ありかゝる所に辛節に由へいはんとせし自然に差別あるべし

上下ともに朝茶のむ秋　馬莧

より入る所に変化は

町切に月見の頭の集めあ鉾　沾

町の上下に附たせり

荷ゟちらくと通る馬次　里

知恩院のかはり比嶋極り舟　莧

うしろ附の二句一章といはん

さくらの後も楓うゝやく　沾

真ならの门前の景を見せり

俎板の錆に水をかけゝらし　里

四季にかゝはるも鱗るゝる料理茶屋などと云ふ面きれと一歌中をとり
て是を絵と見さられ亦越の錦あらし　程奥物に変あり

目利で家をよくもうし之　莧

状箱を駿河の飛脚うけ取て　沾

目きゝ物の入るらん

また持たぬ日の数　里

草の葉にくるみの冬の流ちきり　莧

白雨か後なる虹し

伊駒氣清く綿とりの雨　沾

癖つきて日毎に降らん化物の意なり　○伊駒や河内なり

うき旅ハ驟と濡れた渡りなる　里

托物部なり　○人商人の手に落し女の人の風情なると　うらやましき化物の語に出れ

有明に露ふ明かれるそう　竟

常にありして降るなり

葉ろ手の笛吹中より流れと出く　沾

宇治大堰のあたりも似たらん

柳か傍へ門とさそなり　里

三句一通の気摩詰か筆よりそれつらうし化物そえる柿の句乃若所と同法

西縣になりて世るも果さよ　竟

五柳子か郷へ帰りし頭と含めるや両親かく幽微にあるも句作の労秘なる様なへし

こゝのあと猶にあらめ汁　菜　沾

神用なり

賣物の混飯包なくし　豆　里

商人宿のもてなしにあるなり

夏の暑さハそよりともせぬ　竟

夏の人の木陰なるん

砂と這ふ蘇の中に結(キ)線(ス)の声　沾

光景のあはひを形容し得たり物の姿情に達せりといふべし

別れを人がいひ出せば泣　里

起情なり　○郊外に余波をおしむ女のさまなるべし

巨燵の火いけて待まをまつよせ　筧

後附なり　○奥の一間にまちかねたるさまにてかゝる里を
なまめける風情なれん句なるに其の縁をあらそひたるなるべし

一石ぬかし碓か茶　沾

實を撃碎をはらしる附なり

折くハ窓月のねたる気象相　里

自他の差をはなれ天然自然の理をさとらせたり

仍（ゲウ）に加減乃ちがふ相違さ　筧

二句一体なるよりはるに下の意を嫌ひ侍

月影に今しも煙草を吹てゐる　沾

おもひのまゝ母子稲て居ねむく　里

草の莚掃ちらして悠然たる體なるべし

手拂に娘とやりて嫁のさし　筧

思ひのまゝみだれたるより物の運ひのよきを掛合といふにや左
許用の意なり

京宮の扉をとぢて仕舞る　沾

むすびあつて夜半の字遊び宿のこゝろ面更にあるの用を
結ばれん手越の論なし

花の詠躑躅のさゝはかしるん　里

あまりに其の語しられん方の字はの字は意なり　○花の
句を引あてらん料理のうちにもやさしくこゝろえなし

寺乃ひるしる山際のしろ　寛

其句を賞して轉して泉石草樹まてなりけく昔をあはれき
風色に隨ふせり

みよりもさくさふなりし池の鴨　沾

に尊なり

一雨ふりてあくらか風　里

暖かさを春ふるるの雨なり

猿蓑よかれる西和の松兩端歟

○

沾圃

已か名の云集に洩るゝを比無しとてみるゝん左發辭に起こされし題とぬくそゝぬるや　○　蓑にかゝしの諺より姿をまて此の物をかけ合せましてましらの取るへき句姿をも出せる塩梅謙にあらしく謙にましむしき十歳の諺語拂といふへし

日もくれて静なる閑　芭蕉

松林の地なれん景色を賞して逍遥せる姿をいひ○それらおなしの餘情に深く入り句向しまふ作くへしさるまゝ論するも上手ならぬ作つまりて手跡を設き下手ハあつて余るまゝ何ふとんいえるなるへし

水かれて池の中より花ありて　支考

閣下の景なりしを爰の辭句變化にてあり句諍句躰の言葉に轉す　○乾淍時に庶せり

藻の井まじる岸をいさく　惟然

二句ともこの間なり

鶉かるるとやうて薄の月　蕉

ありし所に変化す

通りのなきに見世をかへる　秋　考

趣向ハ秋としてあきなひの作に義を結べり

盆ちかひ一荷で直きる鮨の魚　然

業体とみて所かへ商ひのあらそひ直きるに用あり

鳥居の外にくせを真似てかくり　蕉

かしこき美に覚えるもやまなん直しかへるの語時節子
趣せり変化あるべし

聟が来てみつもせわに物語　考

うしろ居に見こえて実なつらん

中空よりの怖の声太　然

此鐘八郎　事件のするなるをかへる右左右の語先に不理筆と云也

彼岸の日をとて八やら振舞れ　蕉

雜事の説なりくなる所の佛とみて彼岸の気色を見せる
やうなと云ふ筆を体をのへしらん変ハ新用也

一重羽織がうせて来る　考

着用しみて旅に変へて

きさんじな青葉の比の樅楓　然

山寺山の奥やとるらんいとなしき句新に改まるとのせり
○双の罪に被義失ひるやうの面影あり

山寺門ある明の月　蕉

句として作り物とせざるの一條と見るべし

初あらし畠の人のかはまりり　考

麻あきて吹こぼしけん秋のころもし

水際ひく浜乃小鍋　然

網もよりに至まてと云語を換骨し　ぬれんお越の論也

見て通る紀三井の坂なり　蕉

句に奪ふて二句にわかちとおもふへし　○　見て通る
の語ある句に用あり

花おもひよりていとゝ永き日　考

こち風の又雨になる小ゆあり　然

いとゝの語に付く新年の意あり

わりなくに脈を大事にかゝりし　蕉

定りたる語病なり風と雨新年とうちれんお埒を論すべし

後條の肖像を見る度屠蘇　のみ　考

毛生をくらへ金箔の字ある親仁あるへし後余にあり

喧嘩のさてもむさしとせられぬ　然

大せつな日の二日ある着替達　蕉

喧嘩によき親の意あり　○　鶴ハ昔して姿先の法あり対
に曲輪の立引ともえまし　あるの意あらん

雪かきわりし中の道屋　考

門徒に真如月の法会あることをあらはす前句を補ふの手段を
感するなし

あらぬ親の気掛ハ又出家尻　然

○釈迦の意に転せり年をうけて覚山ある宗門もまなくとし
○陸の句釈教の詞あらかれす

奥の老かくハ近年の作　蕉

位ニのかゝるを見るべし

酒よりも肴のやすき月見して　孝

近く其地のさまとのみにて意あり　酒のやすきと云ふ理面白し

赤鶏頭と庭の正面　然

酒店のもやうあるべし

さまよひぬ娘の心はしら川ゑ　蕉

正面の二字に趣向を起して目の見る所をとらへかゝる向のさまなる其格をとりかかるや

寝所のさむるを知りての夢　孝

其のゆめとおもへきを雑子のおそはれたるに云ひ化せしは妙なり　所のさまとうけて通ふべし　かくハ倒装の句法ともいふべき事也

鳥籠をはらひつまと聞す松の風　然

虚実を味ふべし

大江はらひの奥にきこゆ秋　蕉

大厦のふかさをいひてかゝりけん

茶摘もかへるよしとて帰るか　孝

普請に用ありて下意に移れ

かつ見て所の中を押あふ　蕉

世あつり除菜の高もなくて　然

鴨乃油のまゝぬるみぬ春　孝

貧に餘るのもやうとのみにて花に遊ぶの無く味ふべし

○

夏の夜や崩れて明し冷し物　芭蕉

涼しきを第一の本情といひ其情をあらはしたるに即冷しものは趣向の事物に定たるを思ふべしさるより友に冷しを含める冷し物とは趣向しあひたるにて何くと廣莫にいひ下して明けたる物に冷しを調ひたる滑稽の風骨をみるべし其の白魚の一寸もあやめ草の名も大もあらそはんには同調ならんかくは崩るゝとも全く冷し物の形容みえたる夏あつき夜の明けたる風情をとり得て句に捨て雙関の備ありと見て猶に祖翁の句は幽玄にして窮ひかたく其の経に及ぶべし

露ながらさゝんは蓮の椽先　曲翠

池のほとりなる冷し物に似たり　○　露は荷葉にたまるあはん涼しき風色をうけ椽へまかせを含めるやひそかに寺院の事あり似たる句をよそふべしたるの句似ん様に臣位の謙譲をみるべし

誉ふいつその弱に音をいれて　卧高

河ぞひの木立ちに夏をかけて寂寞なる躰をいへり古句の静かなる様はよそ出川に似た文質の称あり

婦る茂草花に反故押込　惟然

かの芳の詠まれてあらまし居るる夏のよい路て仕舞さみだるるべし花をといふその因を静に薫餌をよみかえたらん

月影の雲も追ふるる露の色　支考

見えわたる月も又张すりしめる露情ともゆ

ちまて錢をとりけるかなしき　芭蕉

そゝく夕暮の風情にして月秋の気あり

猪と秋鳴の外へ追ぬるし　翠

見捨たる事まあらんあへてさまざまなにこそゆ

山のうへ石に名をかきて出し次　高

其あたり人逢ひ捨るもやうなるらん紙引の形ケなる餘情あるらし

飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌　然

面桶ハ下賤の行厨なり

ちりて土まとしくる思障　孝

釣漁の後ともなるへしけしん幽所に変あり

あれたる寺によりたる摺の番　蕉

主人を得たりといへんありしゝ文盛なるへし　○此漢詩にも
みなもとんハ名を埋き跡をかくせるのたくひなるらん

お佛のうへに夕日さし込　翠

酒屋の所ニや秋中なとあるへし

平畦に菜を蒔きしたたき跡　孝

秋此日暮の風情とミゆらん

秋風のし門の居風呂　然

用所の変あり

馬引て賑ひ神る月のうけ　高

よき市の所なりと伏おうし

尾張て住きしものゝ名はなる　蕉

ひとりは韓信の俯伸自在とみるへし　但このあたりハ喧嘩なそと
より名落せし南花なるなるらん

錦好のよしみ花にあらされて　翠

与奪ありて後附の二句一章之　○此ゆくへしは附の余情をと
味ふる漂泊行脚の隠人なく花見る者の財よあひて發する
とく人よきく故の卦掛ありまれく甚ことをきこえる迷ひ輪るゝ
實に落るより手に掻しもそりありしに孫もへし　但し好の

二字ハ能因ニ寄候の事をめぐるや

正月来て襟もよごさ次　高

童部に持して餅まきとさめるといへり即換骨の所なり

春風に蓬莱の塵もはらはすなり　然

大エニ轉ハ花衣の花を此文に傳るをこれら風俗とぞいふ

穀つぶ村へぬすまるゝ也　考

泥泥如如見也

喰つねぬ聟も舅も口きいて　蕉

塞くぬきるぬの論争なるべし

何ぞの時もと山伏みなれ　翠

上方にてかゝる旅なりん○大峯ちゝきりかたん民家に掛袋
掛かける者まゝありとぞ

笹結ひを棒にはさける棲箱　高

蔦直なる所にかて変あり

蕨こハな家卯月晩くそえ　蕉

お宿と紙先はきりつ矢木の町　考

起情なり○家語家名まれにかい気り立てられたるを
気をふるへしこいらの評まだ眼をつけらん矢木八大和なり

際のひよりで雪の氣遣ひ　然

与奪なり

呑ころ手をせぬ酒の川なる　翠

前語の問答なるん家へ余用なる際の字へ附より

荷一つえの分を舩へあげ川なる　髙

淀伏見なとよる處し

封付し文箱きまする月の箸　蕉

遊女舞子の包ともつて月見のもやうを郭しるかや

よく奪なり

そ綴くあつく盆の上箱荒　考

忠兵衛は四條の角に河原町　然

空籠なれん今も此かより　忠兵衛屋あり

高瀬を河ある表一圓　翠

甚町を流るゝとゝ高瀬川といひ又舟の名ともいふ角屋へ揚るの所なれば二句一体にて後なる論なし

今のまに錢をわくす橋の上　髙

船とゞむるまゝ佐人のおそれなるなん

大キな錢かぞんで守ゆる　然

句作の結ひをよろへし

寒かる暮にも扇おしよせるく　考

勤学の山あそこゆ句作雅なり

腰かけ涼し萩柳の下　髙

いまさ蓉のちらけるき安井の茶屋静さるも似たり

俳諧古集之辨　中

俳諧古集之辨　終

羽陽　遅日菴　辨

炭俵集　芭蕉

梅が香にのつと日の出る山路哉

かの桜木笠菜ふるしたく細径に野辺の旅をきかせてふるひおもひさん

ところどころに雉子の啼たつ　野坡

白紙に巧みを用ひ次立の字ちからあり

家普請を春の手すきにとり付て　仝

翁の風調のあらはる鑿彫の音緩ひ静る村里の春色をひきあり

よのなかはあるゝ菜の直　蕉

さかしきせん所なるらん

霄の内ちらくとせし月の雲　仝

根のなきあげと見てあしらはれたん揚抑自在といふべし

蕣越たる次　秋のさびしき　坡

在所の気やすきさまなるらん次も又静なるべし

清水一葉ちりてめいくさ　仝

座敷町と見て侍らんこゝろは籬のもとに微細なる風情にして
水のうへ荳荻の意あり

娘とかたる人はあはせぬ　蕉

菜をと中　娘の名を訊し持を恐れて庭ありくを江の豆に称了許
なし此句二句一意なるらん

奈良がよひ同じ縁なる細基手　坡

娘とあはせぬを家〻と見て、えしき商人の趣向を設けたるやむ
情と合せたらんも自他の意なり　◯奈良がよひの語は伊
勢の艶詞の面影ありて松をしぐれの染かねしをかくせりさは二
句の為に附情といはん句作なり

あさしは雨の晴れぬ六月　蕉

さうし商人の自身のこと見て思あり

頭なる味噌ちるはやる向河岸　坡

水涸の自由といへり

ひとつひとつ出すお袋のこと　蕉

みその用あるを年四と見ていひ出せるとは作意なるらん

絡霄花の持病をあさく人目　坡

猿ともに集て蕉翁なりしん袋かし　但在今の人にかよへり

こんにやくそうり瓢る名月　蕉

暁ちかく酒盛を取きるん執中紳に終るべし

まつ虚に糸掛下地まて夏の原　坡

飲酒に新出を旅かうん発句と時日を異にしるの作例あり

露を相手に居合ひとぬき哉　蕉

借乃利きけの剽軽なるを見べし　本句の栗花あるなり

断崖の洗はれて砕て岸のあけ　坡

嵐ゆき貴の菊ちと熱して見る方の方をとなり

門でおもうさし壬生の念仏　蕉

在不のもの桟敷とりしやむ以庵と合わせるるれて人倫の系訖るき句紙のちらしとみるべし　但此式を称の紀元とも以て里人の証

うちてあつしき物ちゝ似をきるなり

東風ふかば墨のいきれを吹きなし　仝

壬生ちかく畠中なり　○此附二句かくよく似たれど全く前句の用といはん

まく居るやまに拡まかわらず　坡

田家の正月なとまきゆ

江戸の左右むかひの亭主登られて　蕉

店主の楽しかる趣をおもしろく以て挨拶にあるを換骨し殺りぬこと

こちらもいれとかう間をのす　坡

世情とあせり二句一章なり

方々に十夜の内のかねの音　蕉

句のいきほひ用をのべて言底の神あることを見得べし

桐の木高く月さゆるなり　坡

門しめてだまつて寝たる面白さ　蕉

来客もあるまじき夕なるらん 隠逸の人なるべしといひ済るといへるを心の高明なるによりて趣向せられたる妙境なり ○白と

十夜の二句を居とみへさまあら雅して秋冬を待る豁達なる有様なるべし

ひらふた金で表がへする　坡

いやしき面白さに拾ひたるはさすがあるの理あることあり

なつ年に女房のおやを振舞て　蕉

与奪なり

又このころもさせぬ牢人　坡

振舞ひにも召れぬ者も入られたる事ある境様なるを言来て余情あり ○又の字去年を嫌くめり

法華の湯治とおくる暮さなり　蕉

遊ひなりしの身なるの不縁ありてかくあられたる風情なるを換骨の手段作意なるべし

なハ年を下りて麦の出来　坡

その家も東の方に菜と茄子　仝

加茂堤のあたりの気合村のもやうにも似たり

奥に吟あく其中の雑魚　蕉

前句を漁村と見ることはやすく附句のあたりを得ることの難し

子ども多く一夜くに起かへり　坡

宮中の役ありとて衣の袴きたるもうるさしとや郷愁
かきけり

未進の高は　たらぬ算用　蕉

貢税の事なり　○　たらぬの語すゝむるを結なり

隣へもしらせぬ嫁をつれて来て　坡

せわしき時なると怪しむや　○　花の春なれは嫁の郷なと
なそといへりと口説ありさもあれ一夜の説といふへし

屏風の陰にみえるかハらけ　蕉

古今抄に変化のうちの曲なりとて宗波の花とも引あけられ
八景なとよのつねの附合をすて他の三句めぬを無とをといへり

○　ちよつと招きなるもやうに転て祝儀富の意あり

三吟　嵐雪

萬好もむかし職なりけさうり

さてこそ風流の市稼人も多かりしたのしきを行ありくるよと安
流界の景色を嘆息せしなるへし

あさかほや苣に雀鮨の添　利牛

花見に宴なり出帯に泥をとるへし

片原は甚の小坂のかゝりて　野坡

再句のもやう行客の送迎なるへし

外をさまくにかふ相撲場　雪

組ひそむる時なれともて附ぬらん

あそくと結ひきの曹乃月　牛

苗床より郎今とりおろふ姿をみて果る秋のさびしき
ふせんをといへるや

早稲も晩稲も相生に出る　坡

ともに揃ふ　○　おくればしく出るをいへり

泥溝を出き流にのそむらん　雪

溝をそそくに但菊の意あり

あちこちまれに萱の生ふる川　牛

草心のらん菊とみて自ら所なり

濁りの多き蛙を呼に来る　坡

萱の中なり

てらくしも黒る　かいりり　雪

下女なんどやしきなるうへなる菜なりてふるき菜の時を
いへり但摘なるべし

黒谷の口に黒崎聖護院　牛

在所の名を出して畠に青く見た風情に移る

五百のかぶを二度にこそ原　坡

其ころのさびをいへり

縄霞乃いその路ある宮の人　雪

年隣のもやうにして新田あり

人のさはらぬ松なるむちなり　牛

其のあたり伐木制禁の地なれば此所靈に松の繁茂を見つべし

雑役の鞘をおろせば白らくされて　坡

木綾ちらぬ綫の座敷と見て娘ちきらぬ處をいへるや

飯の中なる芋をほる月　雪

漸くと雨降やみて秋の風　牛

鶉なくなりて又鼾かく　坡

雨の降夜の耳ありて越の無用なるに額せん

奉公のくるしき顔に墨ぬりて　雪

抱あげる児の小便をはづす　牛

座ら手へぬりし随なるを鍋炭によごれたる水仕女に執なす仕合作に若衆の言を続たり此附換骨なりて去然の論なし

ふらふらと河内の荷物送りけり　坡

ふと附たり ○かけよりて抱のけたる所に移せり

心よく新着の洗濯　雪

富家なるもやうに似合たるの言のなれと姿に出て前の附なりたる趣向に用をいへり

聟が来て娘の世帯盛になり　牛

ことしからくれと何も呼ぬ　坡

親族ある人出入の者なとの残る言ひなるらん蓋二句ともにして自他の意をいふるし猶後篇あらんや

念佛の調も沸足をさするらん　雪

年寄相手のおとし云ともなるべし ○調きもさはるも是しき僧徒の称もくをうつせり是なるに迷句の手際ともなるべし

此ころは小さくなるよ夕顔　牛

入佛や回向なとして仕舞せしなり云人倫の遠ざる意なるらん

黍の穂を揃へて風に吹倒れ　坡

馬場の喧嘩の詠よすむ月　雪

記情より豆敷よ変ん

米ハ高しく江戸て人よある　牛

不と高りし事情よ難せり〇若敷京の立ハかれる出入事と
言ひ其ハ場よりもてせし者もあるまい訪かれん

今よ庄屋の名ちハ浅と名次　坡

故郷のゆきくの慶けれる話するへし二句一意よして句
士農の変あり

賣まかしおてきせるたくき鉦　雪

事の熟するを待ちまる話とするを越の掛的よ抵物してあり
三句ハ句體の書実よ変あり

ひらりくと雪の降しおし　牛

自然の味ひ云よのへかるし

鎌倉の使きかせよ走らまる原　坡

是名高し地名ハあやしとこゝろあるし

かしき瓜の走れぬ細引　雪

獨ある母とあらめて花のうけ　牛

幕毛麺もちりしく淡ある生るかし風情と母御身の変あり

まとうび踊る西月か餅　坡

まつしき中の孝行と見て讃らるん話を盛をへし

ふか川にまかりて

○空豆の花さきたる麦の縁　孤屋

あをむ麦に紫の色立てるもひとへに造物者の手柄とのみていさゝか
色の他色を引次俳諧物のさびを芳せる事俳諧の風骨といふなれ
し哀れを出て殊にめでたらん

豆乃水鶏のなくる深川　芭蕉

唯に姿のとゝのふると云まへし豆の字古雅を追ふるの場あり

上張を通さぬ程乃雨ふりて　岱水

雨日に輕しき事自然をおぼえ前句はもとより晴天のもやうあり

そ川との掛けハ酒の家中　利牛

静かなる日をきのしを思ふらんこゝろの鍾金結あり

落前に誰も移て居ぬ宵の月　蕉

おりて遊びうかれてあるくさと七夕比の荻ルの顔ひとも広く
見あらく話向しかひらんむ前句に拘てうつると云ふなし

こゝろと塚のころぬ秋風　屋

折あしく事ある折俳合の延誤を考ふへし

きりぎりす欠影の下より鳴出して　牛

○本能登あたりの塚ところん句召由やうなる所に盛るなるし
○蛍ハ夜分にて差合を繰返りては鳴くことの夜分に限ら
されしなりし之に後句の働を譲せさんや

晩の仕事乃工夫するなり　水

仕事ハ影に用あり

娘をよんで不ゆうかいうハ暮らく　屋

よん宗の鐘あるなかより流出ん呼ぶことを未決に作りて五文の二字を結なり

僧都のもとへまづ文をやる　蕉

爰に僧都の名を出せる諸説句と思ふべし意は前用之

風流なる飛脚が寸の峰ゆくなり　水

家のならびに踏を見なゆく　牛

雨も漸く晴るるふぜいとみえてまんなか明るまでどやく出る
あんまい自然に見えるは前用なり

饑けまらい者よりよくなりて　蕉

後附の二句一章といへん ○ 無業に本郷かけたる白髪ある者の
みげなき有様なるべし前句の意ある風情に換骨したりけく

茶乃買金をさけてうり出　屋

商のよく飲む以為に熟せりよ奪なり

このまちとさりやすう花の静之　牛

窓にあかしらり

うれし柳を今にあふしこそ　水

見るにあからかれを其前の語句二句一意に斯しく花柳とも見る現在の姿を
又は前附に数せり ○ 此句を一座対とこそ縮錦の自在鉞あり

雪の絵吹きもらしたる繊月　屋

折にふれて思ひ出る風情なるん

ふらんたるて我の思ひ疎　蕉

繊月なる夢寄に閨怨の意をよせるひなんそうしたるの語もまさ
用あるに似たり

不屑な隣と中のいさかひなり　水

後附なり ○ 鐘らあぐへきることいひなんふりけ後の意なるも
仇になりぬる思ひなるなし

さいち坊主を上人へあゝ次　　牛

是に無用の附ありてかゝる非義なき余情にて手段味ふへし

泣子のひそかに出来し浅ちふね　　蕉

うしろ附の二句一意とふへし　ねひそかの語を老たるに邸中の孫の君なともてしまいらせる賤か妹も家に形のことくにいふを

なもうち誂ある搦揃なんか

置わすれたる灯をとほめる　　屋

前へ無用なる浅茅生をもとして物あさむへき調歴なとをあるも鉾とりて転向しきるん

足のうらにそんて流れ汗をぬき　　牛

前句を夢に移して汗といふちもその字のひとくさなる句他のうへを表すへし

客を送りてさゝ蝸墓　　水

初秋面なる遊めくもてなしん例のかゝ導ともてなれか態をとへり

今のうちに雪は厚さを汁して見る　　屋

今の君は諸様といひさす梅枝なんとおかゝりて変あり昂二句の海を観せんとすと見へし

年貢まんとも参られよかり　　蕉

雪に老年の故頭ありより転向しおひたんおもしろく県令の巡見なとといふ前句に実をとめたるの附にあらし次

息に祖父の白髪のめでたさよ　　水

参に類し人をいへり変の変化をほくへし但句他にかゝるの語なり

堪忍ならぬ七夕のてり　　牛

田圃のうちに見たる風情といふへし

名月のまつ合せなき芋島　　蕉

早まけするかのさそ

ちくいふて茶の飴　屋

前句を吐したてれの譲に附たせり四季折くの物を商ふ徒なるん

このほと宿の通りもうすさびし　牛

嘗秋の光景

山の根際の紅かすかなり　水

寂寞をさまく

よこそでそよく風の吹出す　屋

夕時を報ずる辞

晒のうへに雲雀さへ啼哉　牛

日和となりて附たるん

花見ると女子斗は浮れきちて　蕉

人倫遠きより前句女子の趣向ふのとし郷音あり

余の草なしに菫たんぽゝ　水

句作のおもしろく趣男の変あり ○ 前のよく外面所ほさくれと移く哀れの姿てまうく加へて附意あるへし

○ 百韵　利牛

子ハ裸父はてゝれて早苗舟

まく農夫の浙をいふ農務を悩むの余情あるん ○ てゝれそてゝらともいふひとくの鏡衣なるへし

岸のいろか苦白にさく　野坡

糸の人か思ふんにあり

雨あかり数珠くり鴫の啼出て　孤屋

雨後のあつさに咲あふをを起せし不稀なり

与力町よりむかふ西の勢　牛

笋竹に菜いろの紬たくりよせ　坡

咲よせる趣ならん

馬ゟおろされてわめく人声　屋

白昼に女のあけてる声ならむ

夢の月千葉の茄けりくさし　牛

其時の事を含みてめ所の風情とつり在家の焦頭成し也

掃き跡うつ擅ちるなかり　坡

鴫うけ移て庭に下みうらん床まうとこゆ低集作く臭に敬なり

ちらめきの中てより出る翠り頬赤　屋

買手や来らん足軽町をとふもやうなるべし

坊主になれとやうらり仁兵次　牛

狸つと所ふる死活を味ふへし

松坂や矢川へ入るうら通　坡

不用の地に住るなるん木訥無我の亀心志にあつかり不情態を感させてうるまとを達しゐる自然称なへし

吟ふち膳も流つき闇の萩　屋

風もさらきハくらなるん浮らきの諸あつて扇の的の余情あり 女と
云へて云ふよし

十二三年の衣裳のおそろひ　牛

十二三八年齢を半年安の脇ハ紅あり ○ 近難の衆堂上まで並べる
よそおひなるらしも貴賤のまよ情を含あり

本堂くしるきてふく　坡

八講なとをしまらぬあつて遊ひ拵へる風情なれん二句一章よとも
まるらりいかん方なし

日のあたる方ハあからむ竹の色　屋

手房あかりともつて堂家堂なくしき気しかくなるとみるや

さらし薪さま口まくれ　牛

暑中の光景とみて流るを訴白せしや

近江路のうらみ詞とやそめて　坡

一笑の浩なとくなん郎國の主浩きまあれハ字そとめてよハ俗れなるや
うらハ我等といふとそてそこの方云しそ

天氣の相よ三日月乃黒　屋

旅めらしく心地よるん

生なすらあまよみこむひしこ漬　牛

一日の漁と共よ漬るなるへし

椋の実おつる屋根なる之　坡

常ふりの居浩れよるをとあり　屋

一季ちと隔てまても差遠あり

此影低ころの人乃云ふ浮く　牛

数ならる郎情あり

ほろくと二百余の川ふし出　坂

多病の人乃世易をうかむ暗子也

あろしあへ乃猪又二月哉く　屋

ふてうそ在りぬらん

あい袖を始て見そるも梅あまひ　牛

なかい袖を始るとハ外見を飾るの読あり　○多白のまつりき

挑摘ハ更之ほろくといひこあさくの語又情を卸して甲斐ろらま

世話をやく寡婦の気れをいひらん換骨の意ありて誠の犠るへし

華頭の糸も手又洗らん　縲　坂

意情又換骨せしより手段を工夫め原抄を為るの語為ゆら容才

洗ろきとつるへし

洗くて又為武士の首あ洗とひ　屋

手又洗う汲の意を鞣す

当きよりう今日ん大旱　牛

淀川の水も涸なん

切蛙の喰たをしたる植たそこ　坂

いそう網裏を仕うむ廣庭　屋

瘡貝をまきうらせも待ところ　牛

石化なるらし

苔てすゆうる下駄の音くき　坂

のうまさあらく風情あるらん音くきの語斗あり

湊れあいの名を綯りうま味まかり　屋

女ヲ粧して美きの道をとらえ発語ニ早稲の風俗をよせたり
○新しきところなかれんと尊し　されバ又換骨とも云べし

こもりの裏の遠き井のもと　牛

都なるゝもやうあるより遠きといひえん男のあらくみすると
小僧家家のあるりし　なるべし

暮の月様よ戻る左うしら　坡

立波と行李のあかりを合して様子をいひ又作意へき
財分をいふや

すいきの共乃あまる三州て心　屋

牛の背に餅ちとせり○発句の姿あらしきより当句を設け
て発せり　但発句ハ余情のとゞきて前に論なし

ひつそりと盆ハ通てる浄土寺　牛

市中の新穂を立てわかれん

戸てからとさしなる風呂のや禄　坡

仕舞あつくさきたる句なし

伐きり次柾と桧のすれあひて　屋

松小屋の躰ニ前の句作ニ転倒あり

赤ん小宮たあらうしき　肉　牛

と尊なり

演よしき前の男北前をかえ　坡

師乞比丘尼の諷乃まさよ　屋

前意ハ見て通る風情ニして当句ハ袖ニ住く浅様なるべし

鎌橡の的と手く賞加え前　牛

天鏑乃怖と又咲れなり　坡

此五章ハ吾句の事ニ迎ふる附なり

唐袖とらへにひかるゝ舩の者　屋

喝もして哀むなれ殊なりとそくきし句作感あり

むく起して まい原　飯高　牛

蜷あさる薪を尻にさしかへて　坡

みな菜なる女の云葉をうけるなるなんなを二句一躰と見て論なし

十日ゞ夜の踊まり　ま原　屋

又夜も勝手もひとつに酒や醤油の小売なとしゆ

月花にかきあつむ城の跡そあり　牛

前句を得て所の体の心に殊更なる光景也

弦おろし海雲なる桶　屋

みなとりに花まんとなる風色なくゝ見

桟縄よきぶいて庭に寝たり　坡

肩よりおろす所と諷して處り一躰に附なり
古まる次第に竹舩を庭に寝ると唱あり

○讃談の生

小堂の三絃乃空さへ川になり　牛

小堂の葉と綱子の用あれは後句の空の静なるを附なり

据鳴へ膳なる足をたけ出して　屋

鍋の錆けを念いれてみぬ原　坡

此二句自然にておもしろきあり

麦畠の錦地なける傍示杭　牛

さまざまな人柄を訪ふると称して役人まじり群なる場をさるなん
きびしく人倫を省きて作られし事なるべし

賣手も先づ次頼政の筆　屋

古句の能信長家とうらもことと見ゆれどかゝるもあるらんか

物毎も子持になれバたくさまに　坡

路出し物をすゑとて来れるは序をの挨拶なりともきこゆ
○この二句能考ふべし

又お房の好る菜　つまくく　牛

致仕の人に作り

妓王寺のうへにふれし二尊院　屋

菜かりて仕しまふなるらん　妓王の二字かくれたりしはあまたの人を
隠せるの意あるをとるなるべし

冬ながらさんく寂しかりけり　坡

きのふは祇園清水あたりへ京まゐりしところ

花盛のこゝろ又初雪と降出し　牛

折句のこゝろなり

一はくなりて鐘の聲かな　屋

無心所着ともいへん

跡さして蔵にちさる名の月　坡

捨の市ともいふなるべし

なかすれはとられ棗の壊河ひ　牛

かくせ無ぞる蒔をも見るらん

関を越ふて五郎が鳴きる騎の聲　屋

輪繩さして夜番と呼ぶなるらん

又やめにして美濃使きく　坡

風雅の使にもあらん聘のかへしきこえたり

かくし座は中の巳待をまつるらん　牛

即便の名も声なるもやしありて樂の字は翁凡位二男
なれのそれ伝は数有るなるべし

入る人はこぼれ豆をあはん　屋

春日として仕込なるらんこそ声すさまじの義とのなるらんと以て信
照ありしや　○　豆蒔と云ふは換るなり趣の論すべし

すゞには本郷拾の諸田川　坡

婦人と見ゆる情接りなり

茶屋の見ゆる宿の夜つき　牛

茶屋女とみて手綱をとりむ昧下夕なるらん

はやくとあんどんもしすへちまれ　屋

あんどん三稜長りて明り所より茶屋もみえあるべし

水菜は餘りし添へ汁　坡

赤例の軒ならぶるべし

花のちり銭て居る擬(カタキ)原　牛

山荘への客呂とある　○　擬原は江戸の地名にて手ばなは宵次

尻かるは手添へ居てよく　屋

あちかるうそくし時の雨れ音　坡

伏見とまる従者の降ども厭ひ成る寄せんなるらん

八百はてく月のかくく　牛

厭しき意に転す

拭立て於上の蚊屋ひらきける　屋

同屋ならん旅中といふべし

○

当いひつのる言葉かくらひ　坡

小僕ともおもふべし

大名のあらくて畠の砂のほそて　牛

堺目論に附たせり

何事も善悪しれぬ杤の木　屋

なかれ来れるならん

盃重ね弓固めのあとに侍き　坡

座舗の樹木に転せり

丸ねけ白湯をとりかふ　牛

更に無用なる白湯の味ひあり

投打もこしをかゝめつゝ之　屋

全くその身といへり

見かへし暮饗より借に来る　坡

前句のこしをれは向ひせなり見かへし其投打の後ろなる
後句の事として借すとあるる仮男とならべし

置鏡れ順鋪けの嫁と侍きく　牛

其人の附句にて嫁侍くの語讃詞なり　○　一句の標卓能
して前句に附待つ諌するより後句の意もおのづからやえ

しつれるに湊帳の先将とも合点すべし

やつしら物と蝦乃ゑりもと　屋

ふところ居るゝ方を通るなん余情あり

宴に加わる頼白志安の精進箸　坡

やつしら物に頼白とよせしなん乳にかけるは姑とうゆ衣婦人の情を見せり　○志安とは助諸なり

うんち果てる八専乃そら　牛

うんちは信あり又慍の字といへる説ありいれ前句の智者とするべし

丁寧に仙臺俵の口かゝり　屋

私中の詠なるん

訴訟に済て土産にある節　坡

當時の用捨に附るなり節の字旧字と見るべし

夕月に醫者の名字を書きたり　牛

節の字友よりて二字とつゞきて土手下りての薬師さまに間をふ行在の心当しく見えしもやうといへり　○京都より南部へ通ふ人の薮医と云ふん　いる在所あり即ち木津川の土手隠しなり　その頃の名醫で殊に名ある人々今に薮醫の名をすて給ひしとその身ならず思ひよれるか

包てもと家雞のやきもの　屋

本復の振舞ともうゆ夕月のうつりて

定免と上手の風に欲ありて　坡

後附にして新田の事なり前句と毛見の役人ともみるなん　○風雅といひて貢を減する

もそや仕事もせぬおとろへ　牛

よ奪ふて又保附なり　なせる分別あるなるん　○鍬鎌にあつく村なりと為ること

暑病の跡に土用をとらへさかり　屋

又与奪して後附の二句一章とせり

茂月ありてこゆる逢坂　坡

又く与奪して却てこれら一意となせり前度よりも新釈しき
ことなるべし　○後附を重旅与奪を除き旅て変に力ともせ
せる百歌に名残の曲節とするなるべし

滅もせぬ鍛冶屋のみせ店さびし　牛

同じ意あり　ある言味なり
取りなし候　○見世を見るる人ハ此句面と

門建るゝ次町の相談　屋

町木戸にふれぬ物と用るの意なるべし

彼岸迄一重の花の咲残りて　坡

寺院の門に換る彼岸の二字の働と称すべし

三人よれどもおもしろき春　執筆

二句一章なり　○一三のよりハ更に三昧なる故をあらハせり

○

秋の空尾上の杉に離れかね　其角

天高しと秋気を賦したるの故意をあらハせる盛合の手段ところ
感じ黒くとならぬさきやうなる空のうしきいとも更
まりん心高尚に長ずるむ句なり

おもれて一羽渡る鷹　孤屋

二句画景のこゝろ

飯男に日備掛る貝吹て　仝

網引傭ひ風情もあらんか　○人傭に趣ひ移し候の変あり

月の隠るゝ四廉か門　角

其場なり数塚の萱語ることも月ハ合句の事なりと云ふせり

親父か手の火桶も落すなりし　仝

門番の姿いふ得てよし日備の句に変動あるより与奪せり
○又いふ前句なることを実に作る付ハ越の句却て面白からん但その
句弁にあれハ猿にさしかるし

待ひ居るも九ちに語も次　屋

あまりに若しむ浪人ならんて迷弥といふ事なる場とうす於
拙刺ありしや是八弥用の事なるを弁ずる事なり

下京も宇治の薫なかしつれて　仝

川辺りのものやゝとみてよし

坊主の裳る蓑ハおゝしき　角

舟の人ならん

足軽乃子守して居るハツ下り　屋

対附なり

息吹くうす霍乱乃針　角

あるはの寺ちかるとやあるならんかん

雨の酢に早苗を抱て投て置　屋

手足も泥なりし倒れ居る事驚きのうけ情すし風情あらん但ち奪
してやむ人の投るを以れと人傭をいへる這義よせり

道者乃わさん踊笠の節　角

当句ハ幸坊の流布して踊と云へし当句ハ仕事をかいやりて字て行ふ
趣向也の用と云べし ○ 祢りをそくさし句絶哉あり

行燈の引出しさらんそこし銭　屋

放埒をいふて紙子の意いふなり

親に物きてうらし袷の月　角

飾る敵に眠もやらぬもやうなる人しさて此二句の以為を兼せん
宮よまつくるとあてろい意て気しきあるしのそれもあまる風情
より換すと子供のいろさとみて義理ある毎のたらぬ親なるも浮
世の情なきく人の心こそふんいつれ句とて他に換るぞ手段なり

鉄縄に鮭のきりれいひくこと　屋

変化自然を出す

屠のうちきる紙なる哉し　角

必詳あり

貫之の桜津桂乃花もこそ　屋

紙に桂川とあるしよりあらりの里乃名もおを以て称えする風流を
云うり蓋紀氏の旧跡や古寺なとあるなるらん ○ 文雅ハ表面の飾と
いふ意に変化の用と志るへし

むしのこあり思せてあく　角

花紅葉の詩を寵し如何くのうち鈴ゝまるさ里侍のうちたるを忍
ぶる中に設けしと女の許にあつけたぬる親に附るなり

いき心踏みを筆乃つらひ居　仝

遊女に出来し子ども君らん差ての放埒をかくりえる情あり

官乃縮のあつしき肉　屋

加賀まいりの下向してやくなもたつきそ家の宮るかろく詮故以て
める以為なるへし尤よ尊き ○ 宮く江の高家なりて麻布と出せ

髪菜のふくまされてやつれけり　角

古びてん用となさるゝの餘意あるより出て唖留へ云れし蝶の翅の
此蚊に通され三伏の日影よもぐくと焦次殺といへり尤落ぬれる涼
女のおもかん人に物ふ盛衰の変相と好くめるくれ一賛子が妙境

あぐさとへハ小僧やかる　屋

あぐさハ瘡毒のこと小僧ハ小僕を云二句一躰なり

年の豆蜜柑の核も落ちけり　角

帯ときながら風呂をまつ門　屋

せわしき躰をのべて趣向あり

君こそまことに湯次才の家ときめ　角

風呂ある人ハ腹ふき其善ゆゑん前句のきかれたる風情なり
思ひ妻なきとみえていふや

桿と擣しもの行着浜家　鶴　屋

ひとり寝ぬる後ぬるゝのあつしの女をたづぬる神さび茶屋の
まくら田をといふや前句を云ふかんなの意あり　○行着はる
の語を冬夜の釜ふて桿ハ擣し加へる事なるべし

辛崎ハ雀乃こゑも秋のくれ　角

茶屋筋にて茶店のことあり前句をゆきくの旅人ともこと
雀へ売へらく桿のうらとさゝへし

小夜の涼月の雲ゆき　屋

比良の根あらし吹きたる雲ひるがへし素秋を見られる翳
しているり

紙燭して尋ねる酒の残　角

宜時をうかゞふる人夜更て寂明寺殿へめされ酒のありけるに紙燭して
味噌の付たる小土器を捜し出ることあり言面影をとらせるなん

上塗かゝし張てあく壁　屋

常にまなこせり

小栗よむ行言まぜて哀れさ　角

あの人ゝ詩にそよむ風情にゆ妙なる和歌なる詞あるなるへし
○幽かなる所に餘白を残して三句に壁の肉をとらけるる

魯化称歎せられんや

夕ぐれもみちに浮る船の船　屋

雨なうんよむ山里をとひつりな越の句よむ場にありさされるに
流石なし

孤屋旅立と出立て洛への帰りぬ
其に今四句未満して吟終りし

天野氏真行　桃隣

道くさり拾ひあつめて菓山子かな

流行詠もいかにこし　○この川の物たかりに海とりれる
まなこしの身をえうなさもみてて詞のごとくなくされんや

さんとし者乃落る秋風　野坡

月をひらけら郎俳諧あり

入月にかゝるんのりとうち眺て　利牛

家の香くある風情をも賞しるや水に見えの変を素しらん

塀の外まて桐乃ひろか陰　隣

風姿あり

銅壷よりなまぬるき波て出るさ　坡

二句豪家の秋ミゆ

流るゝ降る雨乃流れや里　牛

泥水を流すなるらん

瓜の花見るなんぞ手にかゝる　隣

畠を見たる人涼しき風情なるべし句作に次第先の違格蔵あり

迫くに取れぬ長谷をまくらぬ　坡

練る大白さより出所　○　長谷寺の山八九里山城のさかいに詰み里ありて瓜作りの古寺に候

参りし者を路にて秋めまりし　牛

母方又伯母なる者まいる作りの家を見るや味わん吹しまかせたるべし

いつより寒の十月乃報らせ　隣

老にまかする陶に自分に貴家の生まれ行余情あり但かく以て古き越後かまへ比れとも主に我れも道句の手段とあるべし

蔵所の中を寺離れにさき立て　坡

家子や東諸国を会ふなるらん富家のもやうあり

家にあまる数の嫁乃仕合　牛

別家にする額をのぞきて蔵所に移す

そんなりと細工に隣る家をなん　隣

先つこりとして家なる秋なり仕合の事といへり

絶おえり見とる夕月　坡

越ハ農師にして論ずべく郡に断家の風あり

吟のうち念仏きこえる魚の肉　牛

元今まゐる頭面あらし上五夕月を結べり

野まくら黒に来て寝ぬる也　隣

漁猟のやうなるも素笑ことを体とするの辞意を含めるや

人の物屑わけ楽しき花に路　坡

記憶なり　○前ハ気の余りなくともみえてあらしの無罣碍なる
れなりくといふるや

もてるや弥生も十五日きり　牛

面白ふるす月ハ光信も迷ふに我宿ならん

よりまの機に火桶いとりみて　隣

いそくことを害まするの意あり

むかいの小言されも見ん白浪　坡

まして様なりあるとや

買込て茶て身躰まるまし　牛

小言を譯して二句一意之韃靼ハ人の手ならぬかる所

帰るりしきら燕さハ侘く　隣

見世あるとさし出したとみてさハ侘くきらいふや帳場の張らぬ空込
の空ならんなるん

此度の叢てきゝし秋の宿　坡

前句の頭に情を知て出来る性の本復といへり三句にまた定家の扱ひとみる也
○此頃の俤異客の意なる一世の郎ハ今る学の高にかりきたらん歟なり

杉の木を陽すり月かゝくなり　牛

急師に転せり薬舗を売して浪花にいづれる風情なるへし

同しこと老の咄しのあくらくて　隣

奪てうしろ附の二句一章とせり

奪されて又薪部屋にまはれ　坡

そこ之怖しの本の字にて云く奈ようしなと思ひて居つらん奪されての語八実に誰せらるの作略といふへし又ら奪ふなり

よわやうに我か身の上を泣てゐる　牛

自他弁用奈ヒをまうへし

志やうぎんされはあかぬ商　隣

拍子に千呂盤をならす弁をこなしてうり詞を句に作れり

帷子も肩にかゝらぬ暑みて　坡

換ひ商人のむさ背おし塩梅なれん見ゆるを好てへし文ひ奪なり

京を出別家す念入　牛

作者のきぬひやうなるをとのゆて暑中も堪きやすきの話を含めるや於考へ候し

爐物に組合せうまれ冨田鯲　隣

鯲の字詳ならす以　〇　たき字本に爐硯に九合なる冨田鯲とあるものあり見とおて見ゆる附八ある家なりの鉄立とも慥なし

遠示の風情なりていはんか

隠と盗んでやつもきまてゐる　牛

髪黒く雪踏ならす思案みて　坡

句末に詞のなりて小僕か横足を止すなんそへあり

先沖に矢を見ゆれ入舟　隣

茶ぎるのとまち扇まん詞とみえて同座の掃拭ていふを含むいふも風流
懲のなきをあんしなまし

酒てより菜からみても花の陰　牛

日和山の遊ひともなるへし

ちるとも風のゆらぬ花さゝ　坡

○

神無月廿日ふか川にて即興

振売の雁あはれ也ゑびす講　芭蕉

雁のさかなの類ひなとありて秋に遠ひ来る詩哥の人にすてゝもやさるれハ其姿を見其情をおもふ事も感慨のあるへきを ちるゝと斉藤遊客の夷講にかけ合せて無事の情と合あらわし手際あさやかにして節物風光に翫しても見えるさまに述る眼かきにつけかゝる親相とこそれあらぬを余つねのみ

降てやとく時雨する軒　野坡

千里ある風情なれん句作に衰調を和せしとやへし

番匠が樽の小節をしらまて　孤屋

やすむの語によて新田の事あり動静の差別を見てその場を奪へるの訓なるへん

片はらに山月をみるこの那　利牛

古今抄に番匠といふ詞の古格なる万葉集の哥と云るとて見るなる論なる二句一折にて親疎によ奪等のことあり

好物の餅を絶さぬ秋の多　坡

蕉門俳諧のもやうなると見定それらあるへき一るとのなる即換骨のこゝろにておほ越の論なし ○ 李部下に無村の周あり

割木のやさき國乃露霜　蕉

前句に遠近の風ありとして趣向しあひたん句作のさびハいつも見るに附たるの寛なるとなるへし 前句に又好あり

綱乃者追つき舩に乗りけて　牛

昴割本にいはゆる天地を一筆にちらするの術あるといはん

星さへ見えず二十八日　屋

暗の趣向直作者の語に徹中次

ひとるきを請て軍の大事之　蕉

皐月のやみとよみならひて前句の頭成の作物へ出つるもやすくと誹向せられしか躰の字をわけて二句一章にするもよくし

淡氣の雪にしら新酒語るもせぬ　坡

雪に臨白みて句作の用を結べり夜の宴に此季を出せる変化に又其の浅からぬところ

賤しむ藤挑灯を咲かして　屋

用辨の差別といひ句辨の変にて変あり

肩癖にはる湯屋の膏薬　牛

前段学問あるより尊て二句一章に作たり

上をきの干菜に刻むもうハの空　坡

肉太なる女の肌ぬきたる姿なるかとし変化ハ更に自他明らか之

馬に出ぬ日を内で恋する　蕉

傍実なる男の梓にそへらして挑てみる風情なるらん

絹買の堪りをさはられて　牛

二句よくその附なるらん餘情あり
仮れるものあり考ふべし　○写本に堪りとある

婿入の門あ取　五十石丸　屋

用辨の変あり

此宿の饑鬼もまとはる月と花　蕉

芭蕉の隠逸に情を記し文に武もある僧まじりと見ていと悩しける
表なきも心持ならん以為とならん句作の按排意味なるべし

砂に喰ひのうたる蔓草　坡

頭陀しそのむ姿と見て花下のたしきをとらるや花ちる下の絵にも
物をも芸ぬ僧人の話とあり八世の曲節に泥に近きをと云れども
いふなりし又餓鬼の語を拾ひしてかつきの還の子となるの杖なるなり
饑を拾ひなると見ても変化なりしかるん

新畠の葉もおちはらく霞の上　屋

河原表にも見て新畠とは云るる所の畑なる蔓壊の霞きえて落
花さしならん

啼くられさる笠とられ坊　牛

東風乃時候

川越の学しの子をとあふみかれ　坡

二句一体にして古事の意なり

手地の寺乃うすき薮垣　蕉

手地は手近の所なりき八越坊の言ゆるならん徽細と蔵すべし

干物を日向の方へいざり世帯　牛

塩出す鴨乃苞なとくなり　屋

海ぞくの干物なるべし　鴨の頭向意あり

算用に浮世を立る京住ゐ　蕉

塩出して立まゐるその風俗とやらや

又沙汰なしにむすめ産（ヨロコブ）　坡

算術の師と見なりて作らん是は四方髪の元ありて先生顔ならんに差やう
なる者なるべし思ひつき不幸にあまりてきせる按排余情あり

よくしと大晦日も四ッのうち　屋

白似なし

菜畠乃このむ竹の縁さき　牛

前へ取寄たる晦日へ行かりもてなしきことと味ありて四行乃このうまき題ん

中よくて傍輩合の借りいゝみ　坡

好む人の噂話なり但女の風あり　○ひとつ勤し町部

硯をならして瘦せぬ夕月　蕉

常も町中も人の物まて旅宿まて出かけるやうもなき身ひとくにこの附の姿なることを数てまるを寓てあそれハ歌の論なし

風やみて秋の鷗乃尻さかり　牛

青楼の醉をはかれて遊侠の徒乃うかれ来たる幹浅けなり乃風情なところ変化なかし　○かゝる毎しき意をまさち

きるちるん那るはかれハ此はちら何ら急し

鯉の鳴子が綱をひかゆれ　屋

ちらほらと米の揚場の猫あり　蕉

斜陽の人新に来く水面にうつりて魚の影く鉄音を含こと八幡宮の記あり但ちらほらの語に影あることを議し水ふる

えいさし倒か好境歳なるまきなり

目黒まいりの連の様ちらや　坡

中きつ気のりし立ちるとふかりて生酔のふせいに変化し来る早覚御情の叢有といふへし

よそも花の三月中時分　屋

花の一字なくてハ色なるの情をきかん

輪炭のちりをはらふ春風　牛

明ぼの風呂挑たてて盆すぎの頭向なるや越を悦ぶるの旅中を
くらべし

○

雪の松折れ口みれば尚寒し　杉風

詩寄を加へ日名字を飾らず此句は此人の生質もゆかしき心地
そせらるれ但寒の字にあまりきその光景なるゆ

日の出るまへの赤き冬空　孤屋

え記出て見つらん　○雪後の景いかも更なるべし

下肴を一舟浜にうち明て　芭蕉

海づらのうきと見え日和のもやうと定て魚売を訴ふという
ならんや

あいさまさる大名の供　子珊

通りさしと思つるまま又来るならん余情あり

身にあたる風も始めく薄月夜　桃隣

羽織のもてなしを形容せりいふべくもなかるべし

粟を刈れく広き畠地　利牛

熊谷の堤きれたる秋の水　岱水

淼漫なる景象とゆ

箱しらえて鰹茶ける　野坡

其雑なるの像商人を顔向せり前句を責折に転ん

二三疋捕ゆもし塀門の鰯　珊

茶屋ハなりかしもなく人さへこなたハ松竹もなかなか立ッなからて
茶屋の主や鼻紙も拾ふ風情なれと旅人の知り人なといわんか

馬の背拭ふ　さら紙子かな　沾圃

旅人ゆゑに洗濯すのなるへし

竹の皮雪踏にはくる夏の来て　石菊

かさなるものゝあるより竹の皮草とえてはやる頃の便
見をとおもハさらんや

稲く子のさす西からそろく

うつえもいわれそ　風

手拭のひらりも見へぬ浦の秋　野坡

初秋なかりさび移るへし手拭ちん子限なる

めつきと風のかはる盆哉　利合

侘しき浦里に自然の場あり

ありくの月をかこちて旅ちに　依く

宵中への月なる子をかゝゆる　桃隣

卿なも雅子のあるなるへし

茶筅のきハ涼しくよに茶ちりて　珊

茶をさみする女子などにも離れきて茶具をかて甚誑をあらし

川かせに涼しく小鮎いつ来れ　菊

茶庵ひろくと村に古来の門を思ひなん

新暑晴て気味よき錦子の膚　凰

宵戸へまかれた山へ行れ　水

此庵ハときからと旅立り出立二句一所として越の後の國へ行んとせし時又川あたりより酒田てうし行へ出る屋形あると頭向せしゟ古人の

手際殊なる人あられ

物おもひなき髭くと親かゝり　屋

本てもなく家路ふんでまたぬ風情なるん何となく立出る所ニ附るなり

さり楽しておほほき精進日　曽良

食事の後までまぬ頭なるん丈妻なるまゝおくれたる底の餘意あるら

繩菜を摘て俵へもり込　隣

秋蕪時のありけるなるへし

わさくハせて茶代乃禮　依

幾年の光景とみて頭向しきたるん

雪ふりてなくハかと身惜てきちらし　圃

意ハとみてあしひ侍らん

とまりへ折て火をとられて来る　珊

此底ニ無用なるより二句一章ニ作りて席々り隠く古衣売の見世つきとゆるへし

又なくも佛の会て鳴とあけ　牛

裏借家のひとり坊主なるへし面新月の夢なり

換くりして賢こかなかり　風

○相場師の意も行れとも一いかん又新月之他高月の新とゐる恰稲あふせまんや
此三章いつれも前句を換骨しぬれへ打越を離せ候

大坂の人ニまれなる冬の月　合

月とみて景義有り句作ハ前句と隔たくあきれ

酒とさへ行ば祖母の氣に入　坡

文盲なの翁にて人たるを以前に附たるなりとこそいへ　見て見るに人といへるや　前句をうつし来たる趣を改めん

ききける法衆の箔かけかり　珊

追従者にあらずる者あるをあらはすべし

次の小部屋て法にむせる哉　牛

武家のもやしきに就ん侍衆とものありしさまとなへたる許世情をあらせり

約束にかゝみて去れば鮫にされ　良

夜分と見えたる自然の事更なり

七月のこの事にかゝる夜露よひにする　風

前句は夜なると言の去那に約束して小宿の斤陽に就ん去るかる帰に換へたり

花の雨あしたふ内に泳ぎし哉　隣

うつる所なり　○前の返句に附て花のちりにあらせり

男まじりに蓮を送ゆ中哉　水

まけたる風情して女中にまじれる餘情あり尊て二句一意とす

俳諧古集之辨　終

後序

あるは桃渓がぬし婦ごと噂めし
集りて芋庵を訪ふその女ら申侍るに
友蔦松子が桜叢書ふらうを編
せし序を乃翻之とて二集となれ
祖翁於持呈めして温涅会高
謙て世々の古言をいふ侍へしとふ
歴年又旋せるなるあり相と我堂の

俳諧のミち大に流行して科斗乃
書の解しかたき物まてあらはし
侍りぬるにや是非なくて此集
をつくれハ世の書物をかりて書き
紙作くるごとく蘊奥秘訣めかせる
ものをなし時好にまよふ筆中乃
譸張となさんと唱家の書林泥出よ
埋もれしに似たらんか游子曰家ハ

物さりし思ひつゝ蕉叟か梓行を許
さるゝとも何事ならぬを殊さらを
手てきかれしそといへりなんそれのみ
か関の様あらんや又曰志ハ是に
よ此冊子の標題を需むへしといへるの
浦のみるみる詞よりも唐のや流との
媚をいさかしへは古集の範に似たるの
ましかるこそ俳諧の譜的をあらめと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛政四年壬子三月發行

書林

井筒屋莊兵衛

橘屋治兵衛